

小島・柳原遺跡群

南川向遺跡

1988・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

悠久の歴史の中で各地域に繰り広げられた先人たちの生活を少しでも多く認識するということは、単にわれわれの懐古の情を満たすにとどまらず、過去の人々の自然との関わりの深さや、人と人とのつながりを知ることによって未来への文化を求めてゆくための一つの道程ともなりましょう。

今回調査の結果を報告する南川向遺跡周辺は、小島・柳原遺跡群として古くから研究者の注目を集めたところであり、弥生時代中期から古墳時代にかけての人々の生活遺跡がこれまでも明らかにされてきました。しかし今回の調査においては主として平安時代の集落遺跡が検出され、当該地域における新たな古代史の一面を明らかにすることができました。そればかりか市内では3例目の緑釉陶器も出土し、長野盆地における当時の社会構造ならびに祭祀形態に対する研究に重要な一石を投ずるものと言えましょう。

時代の要求により開発を進めるための最低限度の調査に止めた結果を、ここに長野市の埋蔵文化財第25集として報告いたしますが、この報告が今後長野盆地の古代史究明のための基礎資料として広く活用されることを期待してやみません。

末筆ながらこの調査のために御協力いただいた東邦商事株式会社ならびに地元関係者のみなさまはじめ、直接・間接に調査に参加された調査会・調査団の各位の御協力に深謝いたします。

昭和63年2月

長野市教育委員会教育長

長野市遺跡調査会長 奥村秀雄

例 言

- 1 本書は東邦商事株式会社による「朝陽ニュータウン」団地造成事業予定地内における、緊急発掘調査報告書である。本遺跡は長野市大字北長池字十二家裏1265—3番 同 大字北尾張部字南川向201—1番地の地籍に存在するが、今回の事業にともなって確認された新発見の遺跡であり、遺跡名は「小島・柳原遺跡群 南川向遺跡」として報告する。
- 2 調査は東邦商事株式会社と長野市教育委員会の協議に基づき、長野市遺跡調査会が担当した。
調査は矢口の指導に基づき千野が総括し、記録は各調査員が分担して行った。
- 3 本書の編集は千野が行い、遺物実測は中殿・横山が、遺構、遺物のトレースは千野が行った。
- 4 遺構図は1：60を基本としているが、微細を要するものに関しては1：30とした。遺物実測図は1：3に統一した。また須恵器は実測図断面を黒色で示し、黒色処理された土師器は、処理された部分をスクリーンで示した。
- 5 執筆は1・3章を千野が、4章は青木・千野が行い、2章は和田博氏の玉稿を賜った。
- 6 調査日誌及び遺構実測図中、遺構名を略記してある。住居址（SB）・土壙（SK）・溝址（SD）である。
- 7 調査の諸記録及び出土遺物は長野市立博物館において保管されている。また遺物の注記記号は遺跡名の頭文字をとってKYMとした。

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経過と方法	1
1 調査に至る経過	1
2 調査会及び調査団	1
3 発掘調査の方法	4
4 調査日誌	4
第2章 遺跡周辺の環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	11
第4章 調査のまとめ	52

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の地形と調査位置①	2
第2図 遺跡周辺の地形と調査位置②	6
第3図 遺構全測図	(折り込み)
第4図 第1号住居址実測図	11
第5図 第1号住居址出土土器実測図	12
第6図 第2号住居址・出土土器実測図	15
第7図 第3号住居址実測図	17
第8図 第3号住居址出土土器実測図①	19
第9図 第3号住居址出土土器実測図②	20

第10図	第4号住居址・出土土器実測図	24
第11図	第5号住居址実測図	25
第12図	第5号住居址出土土器実測図	26
第13図	第1号特殊遺構出土土器実測図	28
第14図	第1号・第2号土壌実測図	29
第15図	第1号土壌出土土器実測図	29
第16図	第2号土壌出土土器実測図	30
第17図	第3号土壌実測図	31
第18図	第4号土壌(井戸址)・出土土器実測図	32
第19図	第5号土壌・土器出土状況実測図	34
第20図	第5号土壌出土土器実測図	34
第21図	第6号土壌・出土土器実測図	35
第22図	第7号土壌実測図	36
第23図	第8号土壌・出土土器実測図	36
第24図	第9号・第10号土壌実測図	37
第25図	第9号土壌出土土器実測図	38
第26図	第10号土壌出土土器実測図	39
第27図	第11号土壌実測図	39
第28図	第12号土壌・出土土器実測図	40
第29図	第13号土壌実測図	43
第30図	第1号溝址実測図	(折り込み)
第31図	第2号・第3号溝址実測図	44
第32図	第2号溝址出土土器実測図	43
第33図	第4号溝址・出土土器実測図	(折り込み)
第34図	第5号溝址実測図	48
第35図	検出面出土土器実測図	50

表 目 次

表 1	第 1 号住居址出土土器觀察表	13
表 2	第 2 号住居址出土土器觀察表	16
表 3	第 3 号住居址出土土器觀察表	21
表 4	第 4 号住居址出土土器觀察表	24
表 5	第 5 号住居址出土土器觀察表	27
表 6	第 1 号特殊遺構出土土器觀察表	27
表 7	第 1 号土壙出土土器觀察表	29
表 8	第 2 号土壙出土土器觀察表	31
表 9	第 4 号土壙 (井戸址) 出土土器觀察表	33
表 10	第 5 号土壙出土土器觀察表	35
表 11	第 6 号土壙出土土器觀察表	35
表 12	第 8 号土壙出土土器觀察表	37
表 13	第 9 号土壙出土土器觀察表	38
表 14	第 10 号土壙出土土器觀察表	39
表 15	第 12 号土壙出土土器觀察表	40
表 16	第 4 号溝址出土土器觀察表	48
表 17	検出面出土土器觀察表	51

図 版 目 次

図版 1	調査区全景・調査区西側全景
図版 2	第 1・2 号住居址, 第 5 号溝址
図版 3	第 3・4 号住居址, 第 8・9・10 号土壙, 第 4 号溝址
図版 4	第 5 号住居址, 第 1 号特殊遺構, 第 1・2 号土壙
図版 5	第 4・5・13 号土壙
図版 6	第 1・2・3・4 号溝址
図版 7	第 3 号住居址出土土器
図版 8	第 1・2・5 号住居址・第 1 号特殊遺構出土土器

第1章 調査に至る経過と方法

1 調査に至る経過

東邦商事株式会社は、長野市大字北長池字十二家裏1265—3番、同大字北尾張部字南川向201—1番地の地籍において、「東邦朝陽ニュータウン」宅地開発事業を計画した。

開発地域は「小島・柳原遺跡群」の周知の範囲内に位置し遺物の散布等も認められたために、長野市教育委員会社会教育課は、同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施することとした。

試掘調査は昭和61年6月30日に実施された。試掘坑は幅50cmで延長約30mを堀削した。遺構検出面までの深さは約30～40cmであり、比較的浅い堆積状況を示しており、黄褐色土を混えた粘土層内に遺構を確認するに至った。確認された遺構は住居址2軒・溝・柱穴等であり、土器破片等の遺物もかなりの量が出土した。

この試掘調査の結果をもとに、市教育委員会では施工に先立って発掘調査による記録保存の必要性を認め、昭和61年8月4日から調査に着手する運びとなった。

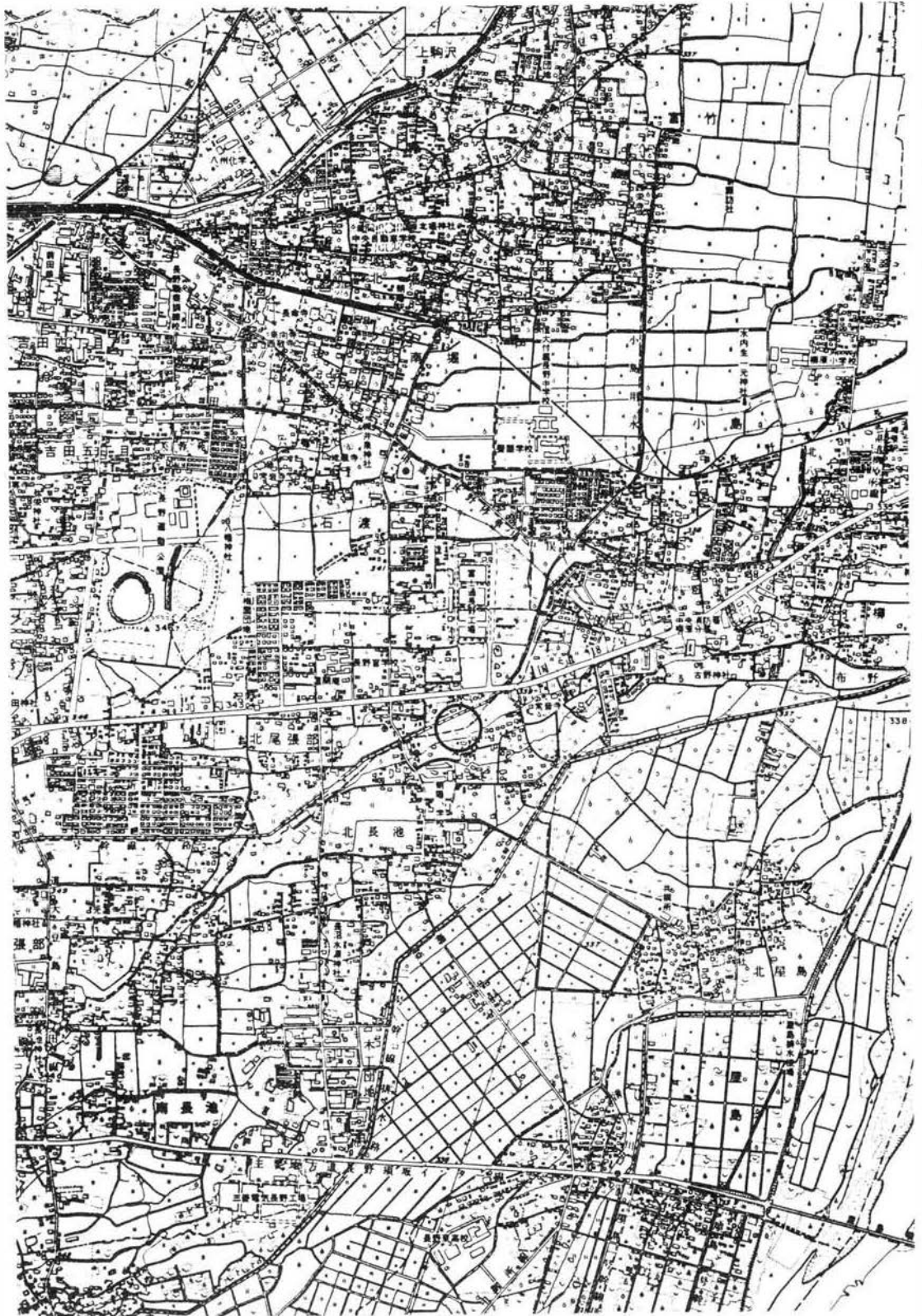
また遺跡範囲中の宅地部分に関しては盛土によって造成されるため、調査範囲は開発によって遺構面に堀削が及び破壊されることが予想される道路施設部分の、約427㎡について調査を行った。

なお本遺跡は前述のとおり周知の「小島・柳原遺跡群」の範囲内に位置するが、その名称については所在地の字名をとり「小島・柳原遺跡群 南川向遺跡」として報告するものである。

2 調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画、及びそれに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会会長	奥村秀雄	(教育長)
委員	米山一政	(長野市文化財保護審議会長)
〃	桐原 健	(長野市文化財保護審議会委員) 昭和62年3月31日退任
〃	清水菅一	(教育次長) 〃



第1図 遺跡周辺の地形と調査位置①

(1/25000)

	〃	関川千代丸	(文化財専門主事)	昭和62年7月16日退任
	〃	小林 孚	(長野市文化財保護審議会委員)	昭和62年4月1日新任
	〃	丸山義人	(教育次長)	〃
	〃	矢口忠良	(長野市埋蔵文化財センター調査係長)	〃
	〃	青木和明	(〃 調査係主事)	〃
監事		高野 寛	(総務課長)	昭和62年3月31日退任
	〃	戸津幸雄	(教育次長副任兼総務課長)	昭和62年4月1日新任
事務局長		吉見 敏	(社会教育課長)	昭和62年3月31日退任
	〃	小木曾敏	(長野市埋蔵文化財センター所長)	昭和62年4月1日新任
局員		吉池弘忠	(社会教育課主幹)	昭和62年3月31日退任
	〃	山崎博三	(社会教育課主査)	〃
	〃	小山 正	(長野市埋蔵文化財センター所長補佐)	昭和62年4月1日新任
	〃	矢口忠良	(長野市埋蔵文化財センター調査係長)	〃
	〃	青木和明	(長野市埋蔵文化財センター調査係主事)	〃
	〃	千野 浩	(長野市埋蔵文化財センター調査係主事)	〃
	〃	倉田佳也子	(長野市埋蔵文化財センター職員)	〃
調査団	調査団長	矢口忠良	(長野市埋蔵文化財センター調査係長)	
	調査主任	千野 浩	(長野市埋蔵文化財センター調査係主事)	
	調査員	山口 明	(長野市立博物館学芸員)	
	〃	青木和明	(長野市埋蔵文化財センター調査係主事)	
	〃	奈須野由美	(長野市立博物館職員)	
	〃	中殿章子	(長野市埋蔵文化財センター職員)	
	〃	横山かよ子	(長野市埋蔵文化財センター職員)	
	〃	古岩井久仁	(信州大学学生)	
	〃	清水隆寿	(立正大学学生)	
	〃	原 正樹	(東京経済大学学生)	
	〃	原田和彦	(国学院大学学生)	
	執筆者	和田 博	(長野市立博物館専門主事)	
調査参加者	赤沼織之助 伊藤 実 上野袈裟男 岡宮幸子 岡宮はるえ 岡宮芳子 春日原 勲 神岡恵美 菊池謙太郎 熊原馨 清水博 白石武 染野卯年 滝沢光明 竹之内袈裟男 田尻岩男 中村至博 平出甲四郎 藤倉英雄 宮沢徳太郎 村田今松 山本千代 山本本治 横田好正			

調査にあたっては、長野市役所朝陽支所関係各位に種々便宜をはかっていただいた。また、整

理作業では長野市立博物館諸氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。

3 発掘調査の方法

試掘調査はバックホーを用いて延長約30mのトレンチを掘削し、遺物包含層・遺構面を調査した結果、事業予定地のうち道路施設部分約427㎡について発掘調査による記録保存の必要性を確認するに至った。

調査範囲の表土除去は、試掘調査の結果に基づきバックホーを援用した。包含層及び遺構検出作業の際に出土した遺物については「検出面出土遺物」として採取し、遺構検出の後、覆土内出土の遺物は覆土上位・中位、床面直上等出土位置毎に一括して採取した。遺構内遺物のうち主要なものに関しては、写真撮影の後、測量により位置・レベル等を記録した。

写真撮影は各遺構ごとに遺物検出状況、掘り上がり状況、遺構内細部について実施した。

検出された遺構の測量は標高・南北軸BMを基準に2mメッシュを組み、簡易的な遣り方測量によって実施し、基本的に1:20、また詳細を必要とするものに関しては1:10の縮尺で行った。

4 調査日誌

8月4日 発掘機材搬入、テント設営。バックホーによる表土剥ぎ作業と並行して、遺構検出作業を開始する。午後雨のため作業を中止する。

8月5日 遺構検出作業継続。本日にて検出作業終了。住居址・溝址・土壌・柱穴等が検出される。

8月6日 柱穴・土壌・溝址等の発掘作業開始。柱穴・土壌等は本日にて掘り上がる。

8月7日 SD1～4 発掘作業継続。SB1・4 発掘開始。

8月8日 SB2・3・5 発掘開始。

8月9日 SD1～4、SB1・5 発掘終了。SB1・5は本日写真撮影も終了。

8月11日 各遺構の発掘作業は本日にて終了する。作業終了順に遺構の写真撮影を行う。

8月12日 遺構実測作業開始。

8月13日 遺構実測作業継続。

8月14日 遺構実測作業終了。機材・テント等を撤収し、現場における作業を終了する。

第2章 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

本遺跡は、国道18号線の北尾張部信号と北尾張部東信号間の南方で柳原1号幹線水路の南辺にあり、北長池字十二家裏を中心に一部北尾張部にかかる。

この附近は長野盆地（善光寺平）のほぼ中央部に位置し、盆地内では最も山地に遠い地点にあたる。西北はるかに秀麗な山容を見せる飯綱山を水源とする浅川は、ここから約5 km隔てた浅川東条地籍の通称浅河原口を扇頂として半径4乃至4.5 kmの典型的な扇状地を展開し、扇端部の地下水湧出地域に北から金箱・富竹・北堀・南堀・石渡・東和田等々の古くからの集落が弧状に並び、それ以東は沖積地に漸移している。

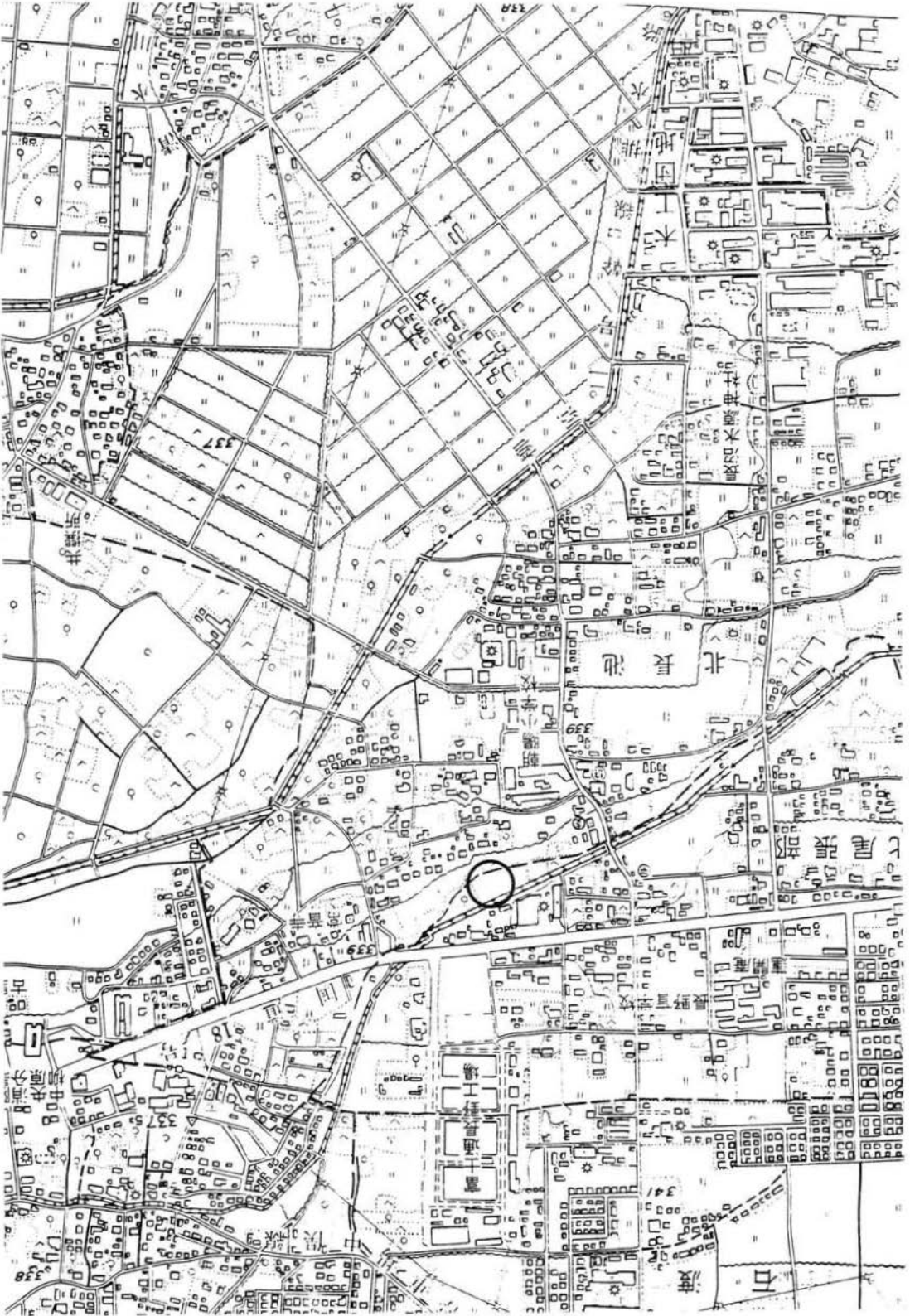
現在の裾花川は妻科から南下して丹波島で犀川に注ぎ、犀口から東流した犀川は裾花川を合わせたうえで、牛島附近で千曲川に合流しているが、これらの流路は近世初頭以来のこと。それ以前の裾花川は妻科地 籍県庁一新田交叉点南一七瀬へと東南流し、上高田・南高田南側を経て犀川に合流していた。一方犀川は川合新田附近から西風間・東風間と大豆島の間を東北流し、裾花川を合わせて長池と屋島間から柳原の南で千曲川に合流していた。また裾花川は東西和田の南から南堀・小島間を乱流して長沼地域西辺の広大な後背湿地へ流入し、浅川を合流して洪水域をつくり、赤沼・長沼の地名起源となり長池もまた同様。それ故に、豊野町南郷には舟場の古名が残り、石部落には太田の渡跡があり、往古裾花川を舟で対岸の長沼地域に渡ったとの伝承もある。

従ってこの沖積地一帯はかつて犀川・裾花川が乱流していた氾濫原で、前述の旧河川敷附近には大小数多くの微高地が散在している。これらはいずれも流路方向の西南から東北に細長く、その上に集落が点在していた。隣接の字小島の名称はそのような微地形を反映している。

本遺跡もそのような小微高地にあり、この小島状地形は北尾張部の上村・中尾即ち桜新町東端から小島境附近までにわたり、本遺跡は柳原1号幹線水路以南に及ぶこの微高地南部を占めている。また本遺跡南には朝陽小学校・池生神社・常音寺等のある微高地があり、両微高地間を旧裾花川支流名残りの旧八幡川が東北流して両岸を浸食し、そのために本遺跡南側に1 m以上の段差が見られる。

このような河川の沖積面浸食が盆地の隆起に伴って進行し、古犀川左岸に当たる長池水源神社から北長池東端、古野南にかけて以前は数mに及ぶ断崖が観察され、氾濫原は一連の自然堤防状を呈していた。昭和20年代までの閑静な近郊田園風景が展開されていた当時は、そのような微地形も明瞭に観察されたが、それ以後国道18号線がこの地域を貫通し、善光寺平土地改良事業による幹線排水路・揚水機場整備以来急速に事業所・公共施設等が進出し、住宅街でお、われるよう

第2図 遺跡周辺の地形と調査位置② (1/10000)



になって様相を一変させ地形も原形をほとんど失ったが、古犀川河川敷は構造改善されて耕地化しても地元では河原と呼んでいたり河岸段差の一部が残るなど、僅かに往時の痕跡を留めてもいる。

2 歴史的環境

朝陽から柳原地籍にかけての微高地には柳原小島の水内坐一元神社遺跡を始め、各所から弥生中期以降の遺構・遺物が検出され、ことに本遺跡南の十二地籍では縄文時代から弥生・奈良・平安時代に人々が生活を営んでいた事実を明白にしている。

律令時代に水内郡は芋井（伊毛爲）郷をはじめ8ヶ郷があった。当時は50郷戸を単位として機械的に分けたため、本遺跡附近がいずれの郷域であったかは定かではない。が、大島は散在していた微高地の総称として本遺跡附近を連想させるに十分であり、条里的遺構のある地域をその西方一帯に繰り広げている北尾張部の地名が現存する点、また東隣の柳原地籍から津野附近が古野郷に比定されることなどから、本遺跡附近は尾張部・大島・古野郷のいずれかに含まれていたとみられる。

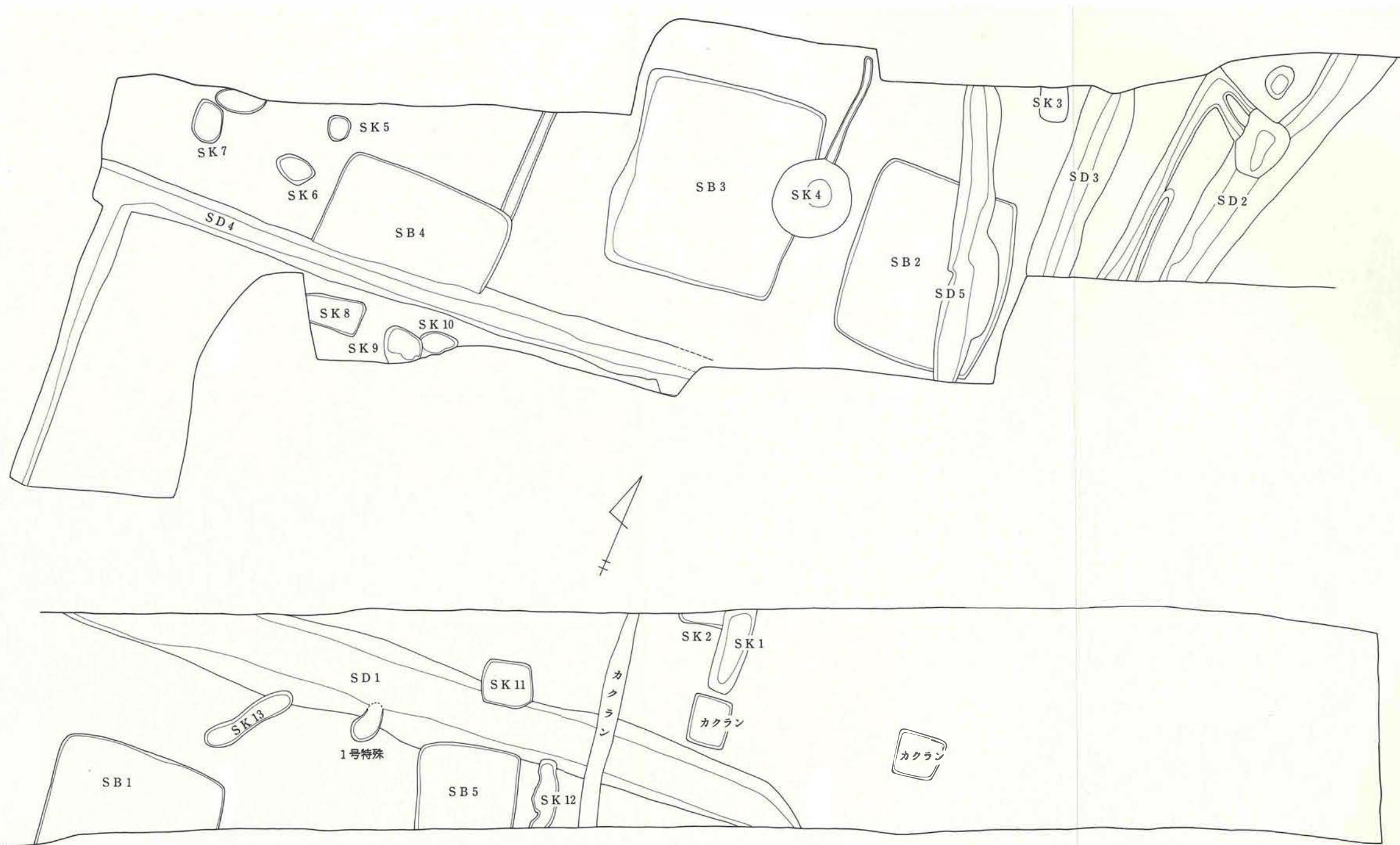
平安時代後期から室町時代の15世紀後半ごろまで井上氏領域で、16世紀初頭の永正頃村上顕国がこの附近一円に進出したと明治14年の村誌は記している。諏訪御布礼之古書では15世紀後半上社頭役を井上氏が勤めたと記録して前記述を裏付けているに対して、明徳3年（1392）の高梨朝高一族所領目録は、尾張部散在郷も東条庄内で高梨領に含まれている旨記載している。天文5年（1536）上社造宮帳によれば前宮四之御柱を尾張部と共に北長池など4ヶ村が勤め同一人物が代官となり、北長池は5貫文、尾張部は7貫文を負担していて、同一領主の傘下にあったことを示唆している。

永禄4年（1561）川中島激戦の後、和田・長池100貫文の地が武田信玄から某（氏名不明）に宛が行われ、武田氏が亡びて上杉景勝が北信を制圧した天正10年（1582）に北尾張部は島津領となる等、中世特に室町から戦国時代にはこの附近一帯は北信諸豪の角逐の地となっていた。

下って近世に入り、慶長7年（1602）の検地打立帳（いわゆる右近検地）によると北長池村473石弱、北尾張部村478石強であるに対して天保5年（1834）の郷帳では北尾張部村が約493石で約200年間に20石ほどの打出しであるに対して、北長池村は874石弱と倍増している。これも松平忠輝領時代の犀川・裾花川筋の改修による旧河川敷の開田成果によるもので、この間の元禄頃に十二ヶ村が枝村として成立している。十二の名称はおそらく当初の戸数からの呼称であろう。

文化6年（1809）に北尾張部の人口は258人、明治14年（1881）には335人に対して北長池村は文化6年245人明治14年344人で、両村の人口増加率はほとんど差異が見られず、近世を通して松代藩領内であったことも共通している。

（参考文献）『信濃史料』『信濃史料叢書』『長野県史』『長野県町村誌』『長野県の地名』『長野地域の地質』



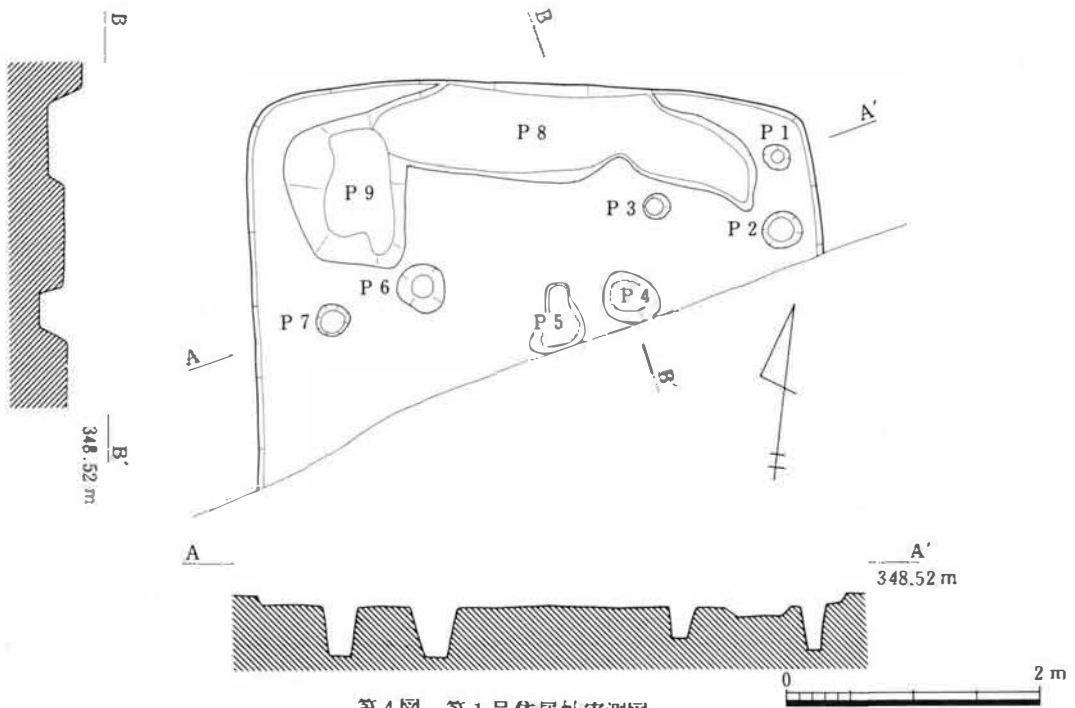
第3図 遺構全測図

第3章 遺構と遺物

第1号住居址

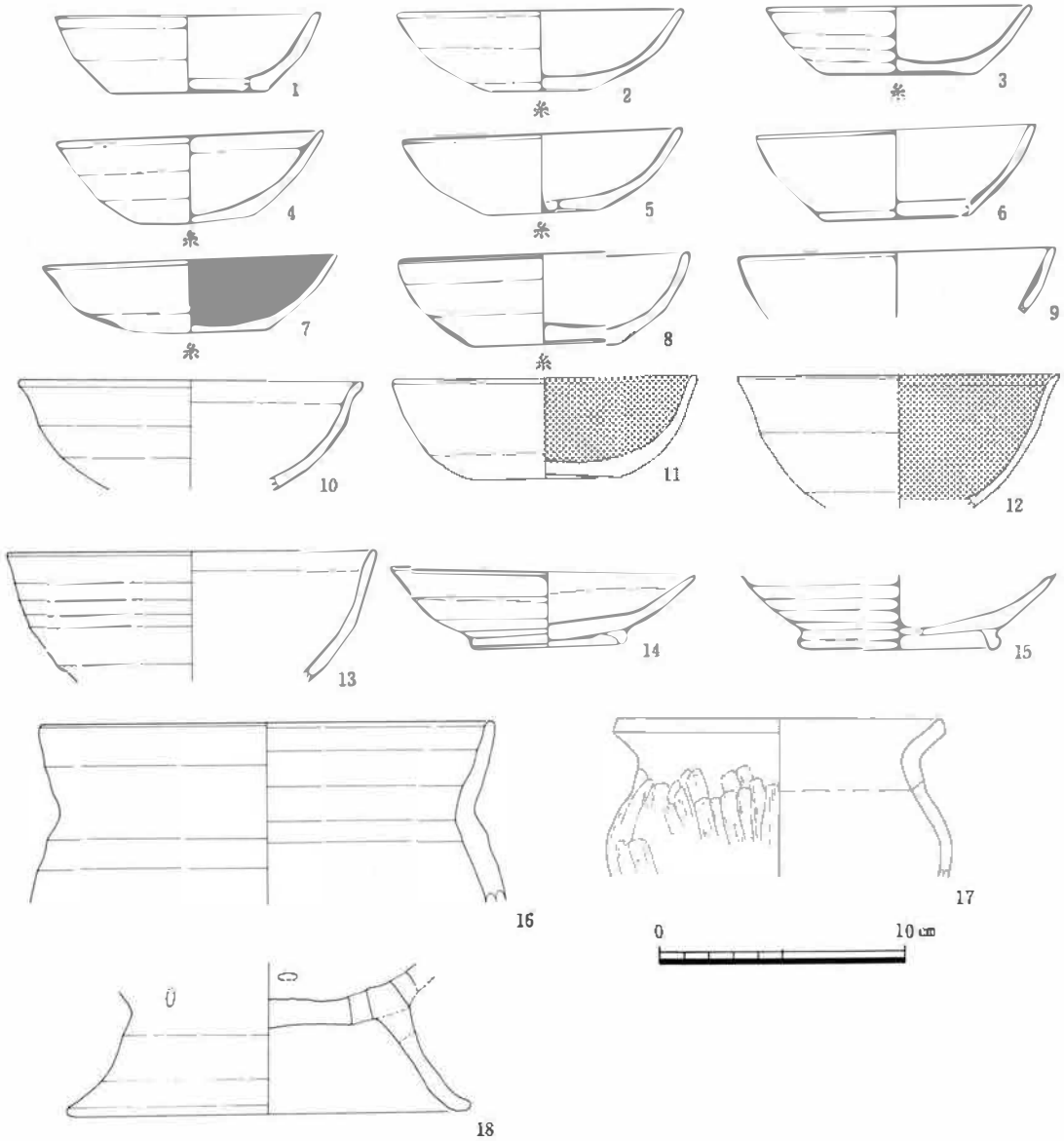
遺構 (第4図・図版2)

住居址南側は大半が調査区域外となる。平面プランは一辺約4.50mほどの隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの掘り込みは浅く10cm前後である。床面は貼り床されるがさほど固くはなく、また壁際は不明瞭なものとなる。周溝は存在せぬが床面からはP1～P9のピットが検出されている。支柱穴にあたるものにはP6・P4が考えられ、深さは約40cmを測り、直に近く掘り込まれている。またP1・P2・P7等は支柱かと思われ、深さはいずれも40cm前後である。住居址北壁ぞいにはP8・P9といったかなり大きな掘り込みが検出されており、本住居址出土遺物の大半はこの中より出土している。



遺物 (第5図・図版8)

本住居址出土土器は主として、土師器坏・甕、灰釉陶器高台付坏によって構成される。実測不可能なものには他に灰釉陶器壺形土器が出土しており、また須恵器は外面にタタキ目のある甕の小破片が3片検出されたにすぎない。



第5図 第1号住居址出土土器実測図

(1)～(10)はいずれも土師器坏で、内外面ともにロクロによるナデ整形がなされている。これらにはロクロナデの痕跡を比較的明確に残す(1)(3)(4)(7)(8)(10)と、痕跡が顕著でなくスムーズな断面を呈する(2)(5)(6)(9)の二者が存在する。底部外面は、確認できるものはすべて回転糸切りがなされている。ただ(4)は回転糸切り後ナデもしくはケズリ等の再調整がなされている。

(11)～(13)は黒色土器の坏で、内面のみ黒色処理されている。(11)は磨耗が著しいが、内面は底部付近を中心に雑なヘラミガキがなされている。(13)は内面に比較的いいねいなヘラミガキが施され、明確な黒色処理は確認されぬものの、黒色処理に対する意識がうかがわれる。

(14)(15)は灰釉陶器である。(14)は高台付の皿で、口縁部は短く外反し端部は丸く終る形態をとる。高台は三ヶ月高台であるが外面の稜は丸みをもって不明瞭である。底外面はナデ調整され、糸切り等の切り離し痕は確認できない。高台接合後に体部下半に一帶のヘラ削りがなされている。釉は漬け掛けかと思われる。(15)は高台付椀の破片である。高台は三ヶ月高台で、外面下端は面取り後ナデ調整され、切り離しの痕跡等は確認できない。

(16)(17)は土師器の甕である。(16)の口縁部はくの字状になだらかに立ち上がり、外面にはロクロ痕を顕著に残す。(17)はやや小型の甕で、口縁部は頸部よりくの字状に強く短く外反し、口縁端部は面取りされる。整形は、口縁部内外面は強いロクロナデがなされ、その後頸部から胴部にかけて縦もしくは斜方向のヘラ削りがなされる。

(18)は高台のついた大型の椀形を呈すると思われる土師器である。底面には3孔、また高台接合部上端付近へ内面から3孔の焼成前穿孔がなされている。整形は内外面ともに雑なナデ整形がなされているのみで、供膳形態以外の機能が推定される。本例のように底部付近に突孔がなされる類例は今のところ存在せぬが、更埴市馬口遺跡第1号住居址(更埴市教委1986)、同社宮司遺跡第1号溝址(更埴市教委1985)出土資料中にも、同様の形態の土師器が認められる。類例の増加を待ちたい。

表1 第1号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	10.7	6.7	3.1	1/6	ロクロ調整 回転糸切り	ピット
2	土師	坏	11.5	4.2	3.3	3/4	ロクロ調整 回転糸切り	〃
3	土師	坏	10.7	6.4	2.7	完	〃 〃	〃
4	土師	坏	10.7	5.3	3.5	1/4	〃 回転糸切り →ナデ	〃 〃
5	土師	坏	11.2	4.6	3.2	1/5	〃 回転糸切り	覆土
6	土師	坏	11.2	6.0	3.6	1/6	〃	〃
7	土師	坏	11.8	5.7	3.0	3/5	〃 回転糸切り	覆土・ピット
8	土師	坏	11.7	5.8	3.7	1/4	〃 〃	ピット
9	土師	坏	12.9			1/8	ロクロ調整 内面ミガキ	覆土
10	土師	坏	13.8			1/2	〃	ピット内
11	土師	坏	12.2	6.2	4.1	1/4	〃 内面ミガキ 黒色処理	覆土・ピット内

1 2	土師	坏	13.2			1 / 6	//	内面黒色処理	覆土
1 3	土師	坏	14.8			1 / 8	//	内面ミガキ	//
1 4	灰釉	皿	12.2	6.0	3.1	3 / 4		ロクロ調整→外面下半にケズリ底部回転ケズリ→ナデ 漬け掛け	ピット内
1 5	灰釉	椀		8.0		1 / 5		ロクロ調整 底部回転ケズリ→ナデ 漬け掛け	覆土
1 6	土師	甕	18.3			1 / 12		ロクロ調整	ピット内
1 7	土師	甕	13.2			1 / 4		ロクロ調整→外面ケズリ内面ナデ	//
1 8	土師	台鉢		16.4		3 / 4		ロクロ調整→雑なナデ	覆土・ピット内

第2号住居址

遺構 (第6図・図版2)

住居址の東側半分を5号溝址に切られている。平面プランは3.70×5.0 mの長方形を呈し、主軸はN-10°-Wを測る。検出面からの掘り込みはいずれも浅く15~20cmほどである。また東壁はややなだらかであるが他はいずれも直に近く掘り込まれている。床面は全体に貼り床されているがさほど固く踏みしめられた状態ではなかった。床面からは、P1~P5のピットが検出されているがいずれも掘り込みは10cm内外と浅く、支柱穴と認められるものは存在しない。またピット内からの遺物の出土も認められなかった。

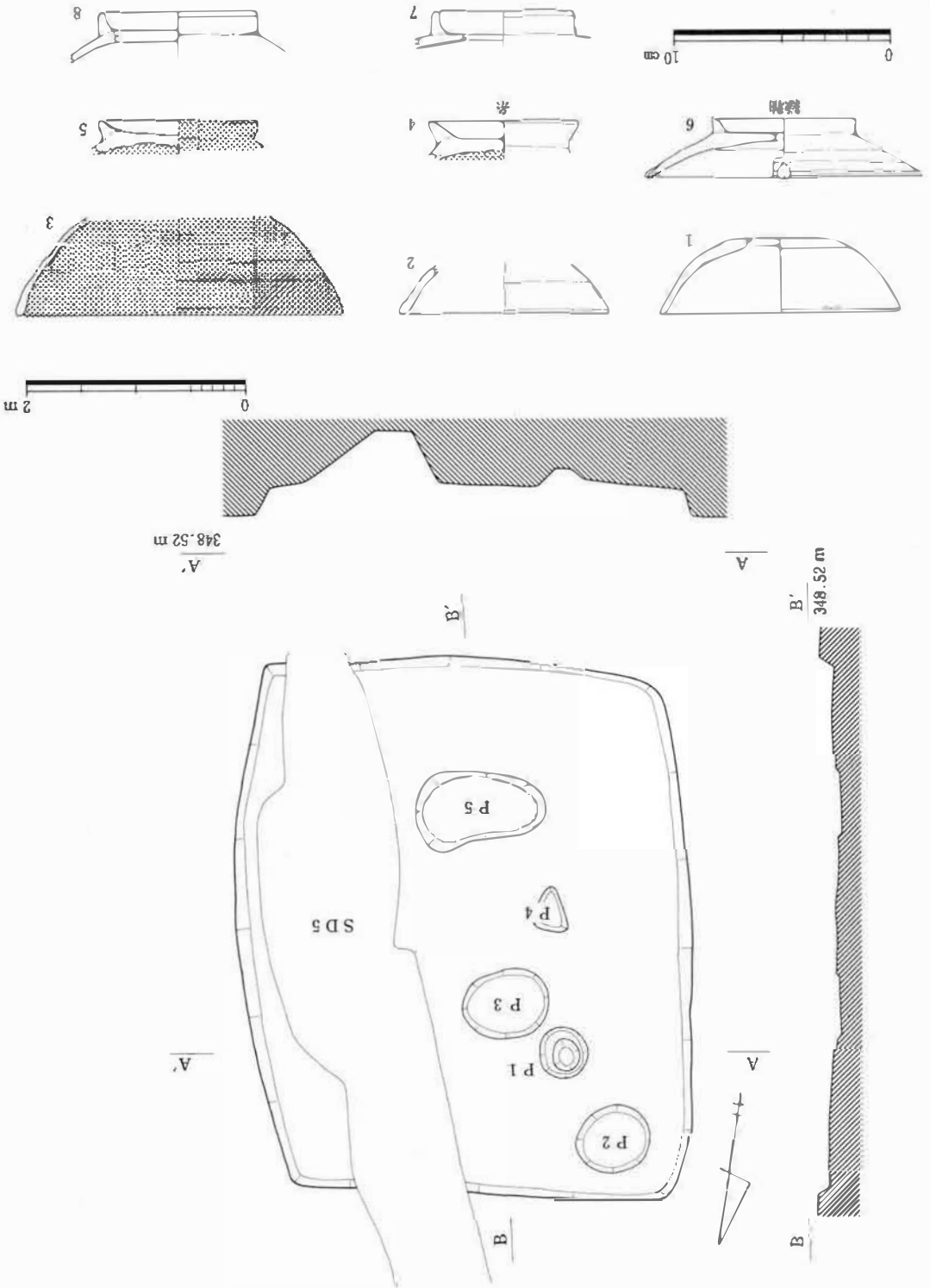
遺物 (第6図・図版8)

(1)(2)は土師器坏である。(1)は底部より内湾ぎみに立ち上がる坏部形態をとる。ロクロナデされるが器表の磨耗が著しく調整等の詳細は不明である。(2)は口縁部破片で内面はロクロ痕を顕著に残す。

(3)~(5)は黒色土器である。(3)は底部より内湾ぎみに立ち上がり端部に至って肥厚し、丸みをもって終わる形態を呈する。磨耗が著しく詳細は不明だが、口縁部周辺は内外面ともに比較的にいいなへらミガキが行われ、内外面ともに黒色処理がなされる。(4)(5)はともに高台付坏の底部付近の破片である。(4)は坏部内底面がへらミガキされ黒色処理される。高台は断面三角形を呈しハの字状にやや長く外反する。底外面は回転糸切り後、雑なナデ調整がなされている。(5)は内外面ともに黒色処理がなされ、高台は断面三角形を呈し短く開く形態を呈する。

(6)は緑釉陶器高台付皿である。皿部は底部からやや内湾ぎみに直線的に外反し、口縁端部はやや強いヨコナデが行われることにより若干外反し、鋭く終わる形態を呈する。口縁端部には全体

第6图 第2号住居址·出土土器类测图



で4ヶ所輪花が施される。また内面の皿部と底部との境には一条の沈線が施される。皿部の調整は内外面ともにていねいなロクロナデが行われ、釉は内外面ならびに、底部外面の全面にわたってかけられる。高台は角高台で高台外端にて接地する。底外面は回転糸切り後ロクロナデが施される。

(7)(8)は灰釉陶器高台付椀の底部破片で、高台はともに三ヶ月高台である。

表2 第2号住居址出土土器観察表

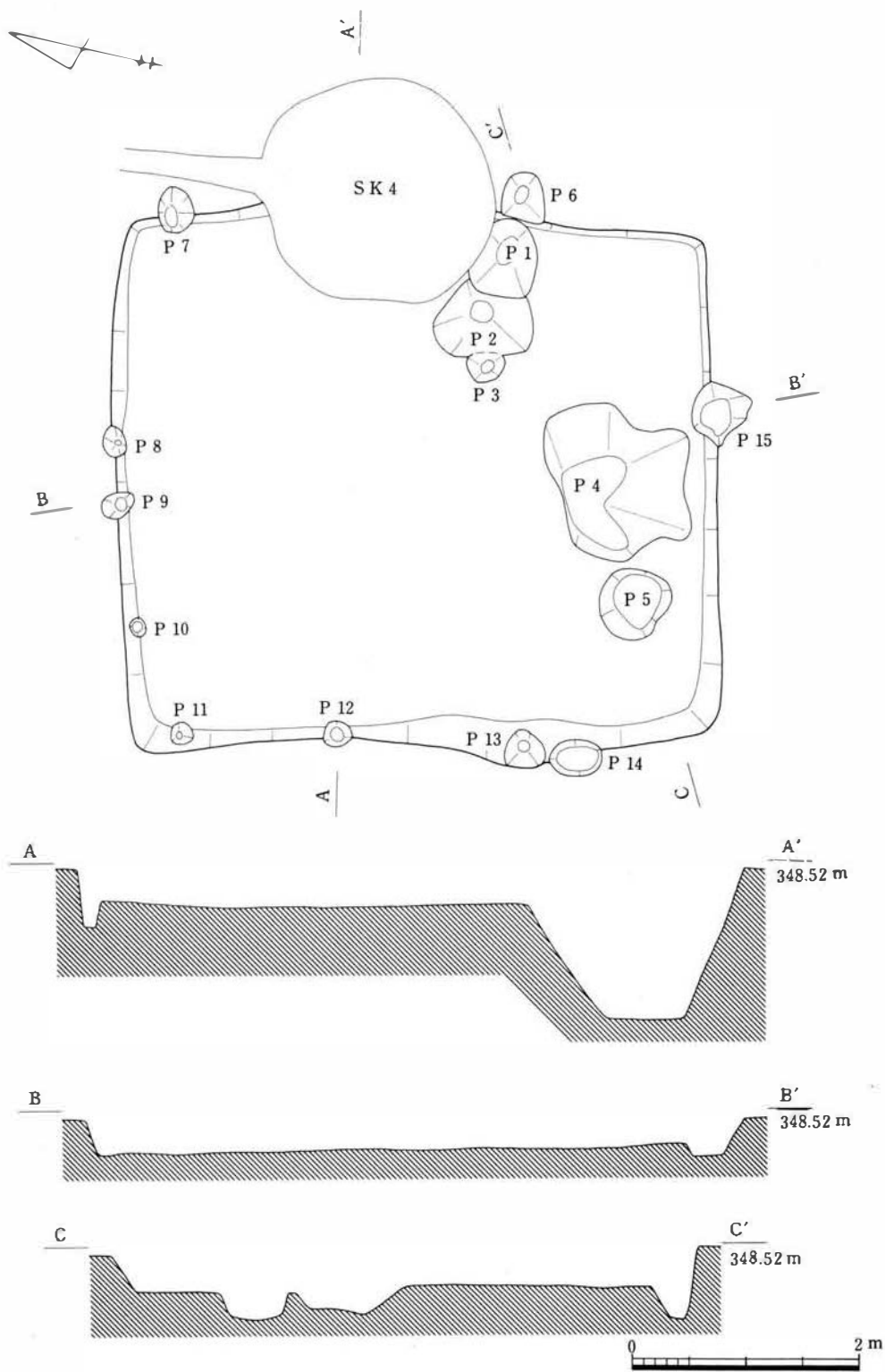
番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	11.0	5.0	3.4	1 / 4	ロクロ調整回転糸切り	覆土
2	土師	坏	9.4			1 / 6	〃	〃
3	土師	坏	14.8			1 / 3	ロクロ調整→外面口縁部 周辺ミガキ 内面ミガキ 黒色処理	〃
4	土師	台坏		6.8		3 / 4	ロクロ調整 内面ミガキ 黒色処理 底部回転糸切 り→ナデ	〃
5	土師	台坏		1.7		3 / 4	ロクロ調整 内外面とも に黒色処理	〃
6	緑釉	皿	12.8	6.7	2.7	2 / 3	ロクロ調整 回転糸切り →ナデ	〃
7	灰釉	椀		6.2		1 / 8	ロクロ調整	〃
8	灰釉	椀		7.0		1 / 8	〃	〃

第3号住居址

遺構 (第7図・図版3)

4号土壌に東壁中央部を切られる。5.0×5.30mの隅丸方形を呈する住居址で、主軸はN-80°-Eを測る。検出面からの掘り込みはさほど深くはなく30~40cmを測り、西面はややなだらかであるが他は直に近く掘り込まれる。

床面は貼り床され、中央部付近はかなり固く踏みしめられていた。床面からは周溝ならびに柱穴らしきものは確認されておらず、かわりにP6~P15にみるように各壁面にそうかたちで支柱と思われる痕跡が確認されている。P2はP1に切られた形で検出されているが、ともに周辺ならびに覆土内には焼土・炭化物等かなりの量が存在し、4号土壌によって本住居址のカマドが破壊された痕跡と理解されよう。



第7图 第3号能居址实测图

P1・P2 から南東壁隅の部分にかけては、完形の土師器坏形土器が比較的多量に出土しているが、いずれも床面からはやや浮いた状態で出土している。P4 は1.0×1.50mのやや不整形な掘り込みであるが、内部からは遺物等も出土せずその性格は不明である。

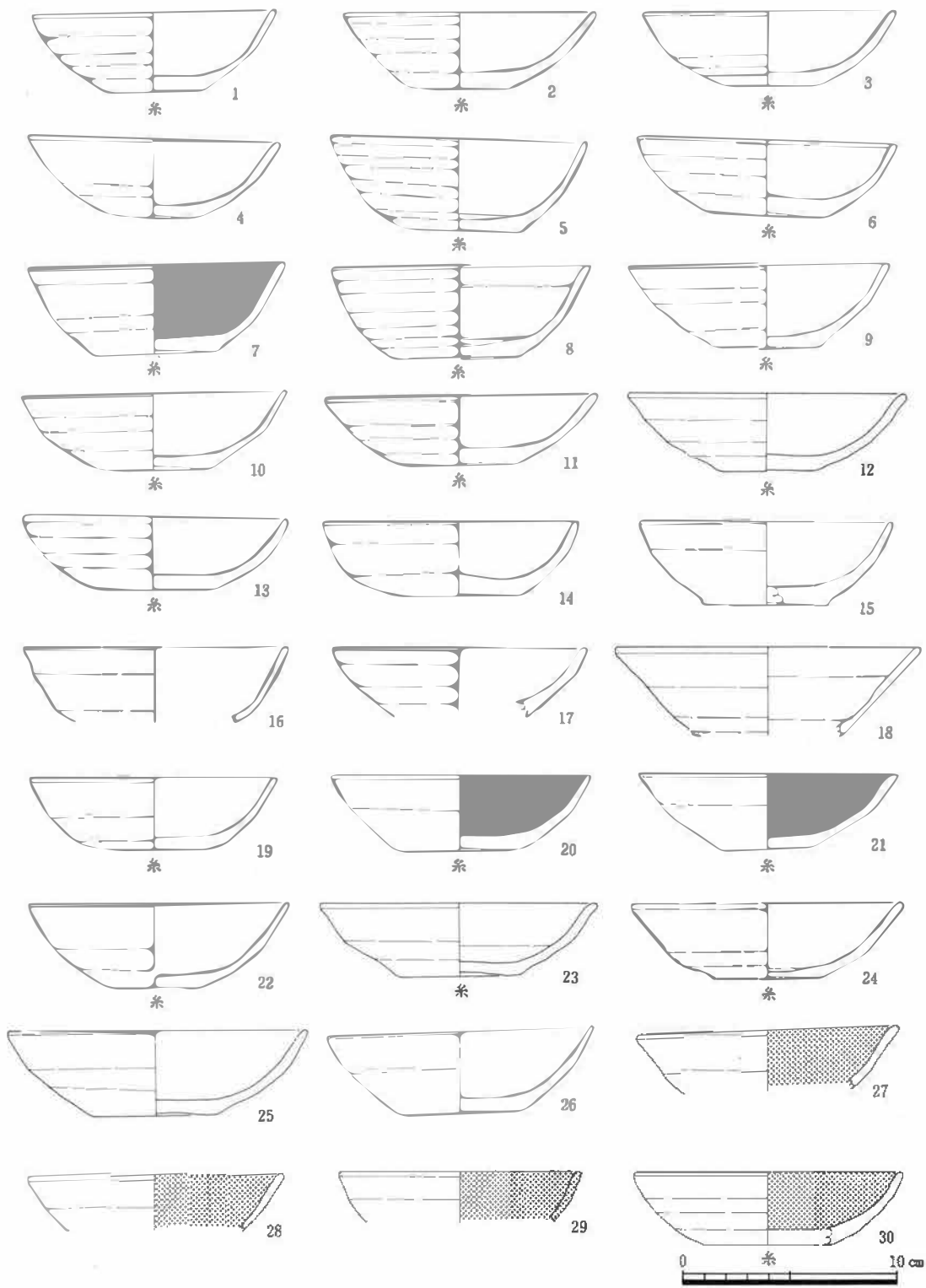
遺物 (第8・9図・図版7)

土師器坏を中心に本遺跡では最も多量の遺物が出土している。(1)～(26)はいずれも土師器の坏である。口径は11.5～13cm、底径は4.5～6cmぐらいの範囲に納まり、各個体の法量には大きな差異は認められない。整形はいずれもロクロナデされ、底部は確認できるものにおいては、すべて回転糸切り痕をそのまま残している。

(27)～(31)(33)はともに黒色土器である。(27)～(29)は内面に雑なヘラミガキがなされ、黒色処理される。(30)はやや厚手の雑なつくりであるが内面は比較的ていねいにヘラミガキがなされ、黒色処理される。(31)は内湾ぎみに立ち上がった坏部が端部にて短く強く外反し、丸みをもって終る形態を呈する。外面はロクロナデされロクロ痕を顕著にとどめる。内面はていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。(33)は底部より内湾ぎみに立ち上がって終る形態をとり、外面は比較的ていねいなロクロナデがなされる。内面はヘラミガキされて黒色処理され、底部は回転糸切りされる。(32)は高台付坏の底部破片である。坏内面はていねいなロクロナデが行われる。高台は断面長三角形を呈してやや長くハの字状に外開し、内外面ともにナデ整形される。底外面は全体的にナデ調整される。

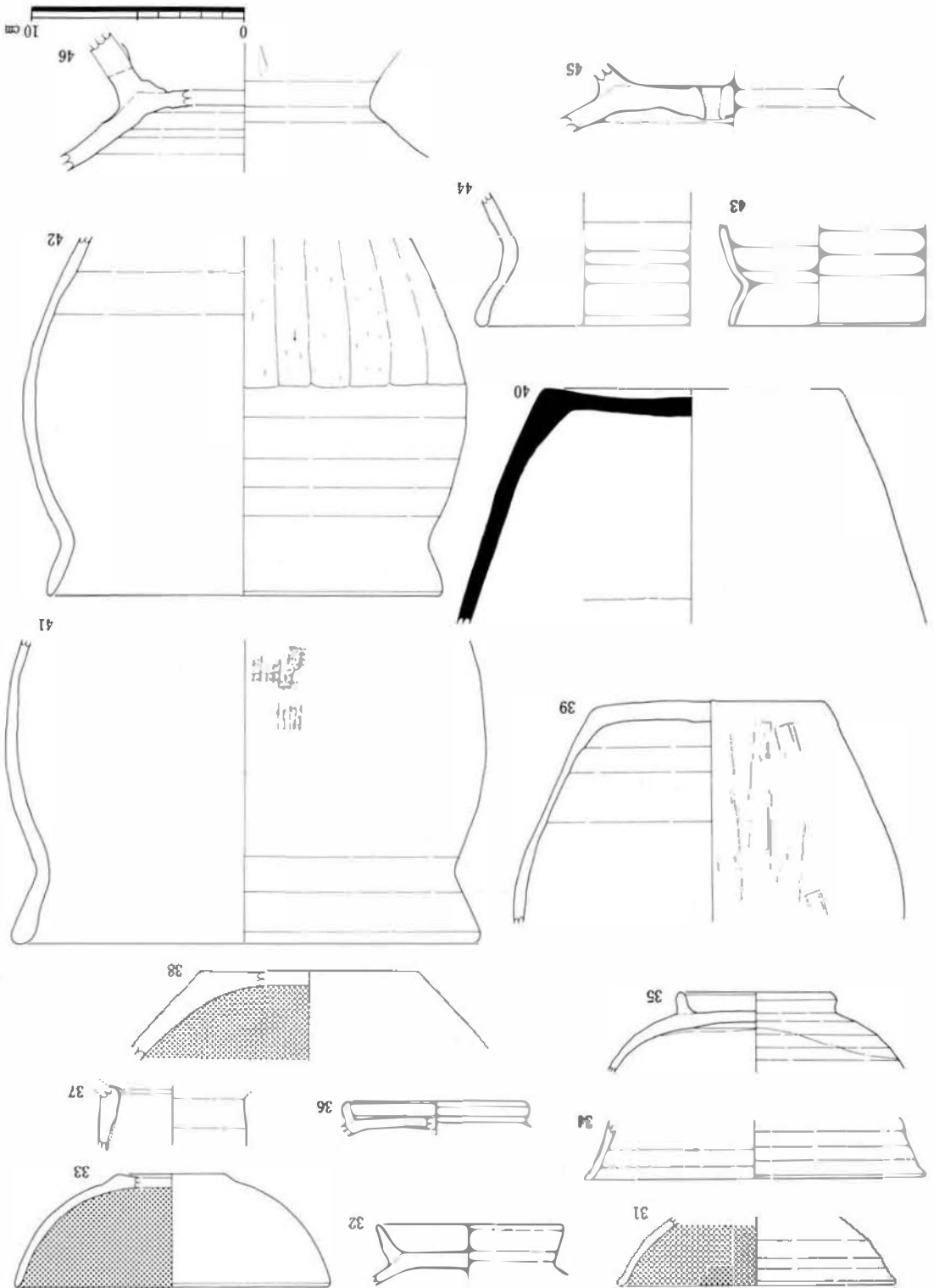
(34)～(37)は灰釉陶器である。(34)は高台付碗の口縁部付近の破片で、端部にて若干外反し丸みをもって終る形態を呈する。(35)も高台付碗で、坏部外面の底部からの立ち上がり部分には一帯のヘラケズリが施される。高台は三ヶ月高台であるが内外面とも強いナデ調整がなされ、外面の稜は丸みをもって不明瞭である。高台の接合も比較的雑であり、底外面はナデ調整される。釉は漬け掛けで、坏内面は底面を除く全面にかけられている。(36)も高台付碗の底部付近の破片である。高台は三ヶ月高台であるが端部にて内折するような形態を呈し、内面が丸く肥厚する。底外面はナデ調整される。(37)は灰釉陶器長頸瓶の頸部付近の破片であろう。(38)は鉢の底部破片である。内面はていねいなヘラミガキがなされ、黒色処理される。底外面は全体にナデ調整されている。

(39)～(44)は甕で、(40)が須恵器で他は土師器である。(39)の外面はロクロナデ後、縦方向のヘラケズリがなされ、内面にはロクロ痕を顕著に残している。(40)は須恵器で、外面は平行タタキの痕跡が認められ、自然釉がかかっている。また、内面底部には指頭による雑な調整痕が残される。(41)の口縁部は頸部からくの字状に緩やかに立ち上がり端部にて肥厚する形態を呈する。口縁部は内外面ともロクロナデされ、胴中位には格子目状のタタキが認められる。(42)は口縁部が頸部からくの字状に短く外反し、最大径は胴上位に有する。口縁部から胴上半は強いロクロナデが行われ、胴下部から胴上半も強いロクロナデが行われ、胴下半はその後縦方向のヘラケズリ



第8图 第3号住居址出土土器实测图①

第9图 第3号住居址出土器类测图②



がなされる。(43)は口縁部が頸部でくの字状に外反したのち内湾ぎみに立ち上がる形態をとり、内外面ともロクロナデされる。(44)は口縁部が頸部から緩やかにくの字状をなして立ち上がり、端部付近で内湾しながら肥厚する形態をとる。内外面ともロクロナデされる。

(45)(46)は高台のつく大型の椀形を呈する土師器の破片と思われる。(45)は内外面ともに強いロクロナデ調整が行なわれ、底部中央付近に1ヶ所焼成前の穿孔が認められる。また底外面には回転糸切り痕が残されている。(46)も内外面ともに強いロクロナデが行われ、高台部には透し孔の痕跡が認められる。

表3 第3号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	11.4	4.7	3.7	1/2	ロクロ調整 回転糸切り	床面
2	土師	坏	11.6	4.6	3.5	3/5	// //	//
3	土師	坏	11.6	4.6	3.5	完	// //	床直上・覆土
4	土師	坏	11.7	4.5	3.7	1/3	// //	床面・床直上
5	土師	坏	11.8	5.9	4.3	3/5	// //	床直上
6	土師	坏	12.0	5.3	3.5	完	// //	床面
7	土師	坏	12.0	5.8	4.2	4/5	// //	覆土
8	土師	坏	12.0	5.6	4.3	3/4	// //	床直上
9	土師	坏	12.1	5.3	3.9	1/2	// //	覆土・床直上
10	土師	坏	12.5	5.2	3.6	1/4	// //	覆土
11	土師	坏	12.6	5.4	3.2	1/2	// //	//
12	土師	坏	12.8	4.6	3.7	完	// //	覆土・床直上
13	土師	坏	12.3	5.5	3.4	1/2	// //	ピット
14	土師	坏	11.8	5.8	3.5	1/2	ロクロ調整 回転糸切り →ナデ	ピット
15	土師	坏	11.7	6.0	3.9	1/4	//	床面
16	土師	坏	12.4			1/3	//	覆土
17	土師	坏	11.6			1/4	//	ピット
18	土師	坏	14.2			1/4	//	覆土・床直上
19	土師	坏	11.6	5.3	3.4	1/2	// 回転糸切り	ピット
20	土師	坏	12.1	5.8	3.6	4/5	// //	床直上
21	土師	坏	12.0	4.3	3.6	1/2	// //	覆土・床直上

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他		備 考
			口径	底径	器高				
2 2	土師	坏	12.2	4.3	4.0	完	//	//	床面
2 3	土師	坏	12.8	5.6	3.5	1/2	//	//	覆土・床直土
2 4	土師	坏	12.6	5.0	3.5	1/7	//	//	床直上
2 5	土師	坏	14.1	5.8	4.0	5/6	//	//	//
2 6	土師	坏	12.4	5.7	3.8	3/4	//	//	覆土・床直上
2 7	土師	坏	12.1			1/6	ロクロ調整		床直上
2 8	土師	坏	12.0			1/6	//		//
2 9	土師	坏	11.2			1/6	//		覆土・床直上
3 0	土師	坏	12.4	6.1	3.4	1/3	//		ピット
3 1	土師	坏	12.8			1/6	//		//
3 2	土師	坏		8.6			//	回転糸切り→ナデ	床直上
3 3	土師	坏	14.7	5.1	5.2	1/3	//	内面ヘラミガキ黒色処理	//
3 4	土師	坏	15.5			1/12			覆土
3 5	土師	坏		7.0		3/4	//	外面下半ヘラケズリ	床面
3 6	土師	坏				1/6	底部ナデ		覆土
3 7	土師	坏				1/6			//
3 8	土師	坏		10.2		1/4	内面ヘラケズリ黒色処理		ピット
3 9	土師	坏		10.6		1/2	ロクロ調整→外面ケズリ		床直上
4 0	須恵	甕		13.8		1/3	外面平行タタキ		覆土
4 1	土師	甕	21.4			1/6	ロクロ調整 外面格子状タタキ		ピット
4 2	土師	甕	18.4			1/5	ロクロ調整→外面ケズリ		床面
4 3	土師	甕					ロクロ調整		覆土・床直上
4 4	土師	甕					//		//
4 5	土師	台付鉢				1/4	ロクロ調整 底部に穿孔有		床面
4 6	土師	台付鉢				1/4	//	高台部に透し孔有	覆土

4号住居址

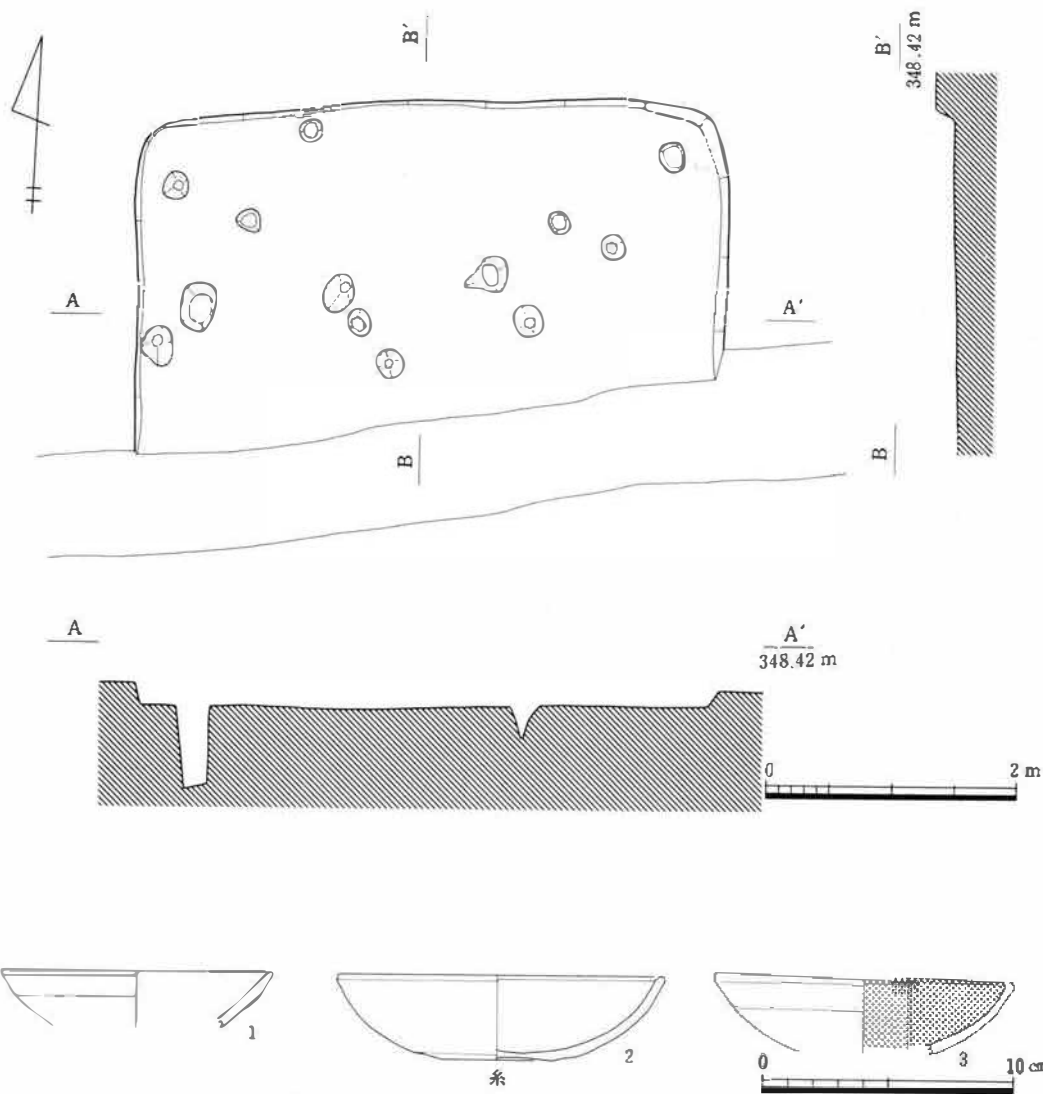
遺構 (第10図・図版3)

4号溝址に遺構南半を切られている。平面プランは一辺約4.70mの隅丸方形になると思われる。主軸はN—3°—Wを測りほぼ南北方向をとっている。検出面からの掘り込みは20cm前後とやや浅く、西壁は直に近く掘り込まれ、北壁・東壁はいずれもややなだらかである。床面は全体に貼り床がなされ、中心部はかなり固くしまっている。床面上にはピットが13個検出されているが、いずれも浅いもので本住居址に伴うものであるか否かは不明である。ただP1は深さ約70cmで直に近く掘り込まれ、柱穴である可能性が強い。

遺物 (第10■)

土師器坏・甕等の小破片がかなり出土しているが、実測可能なものは図示した3点の土師器坏にすぎない。

(1)は口縁部に破片で、口縁部下端に稜をなして軽く外反する形態をとる。(2)は坏部が底部より内湾して立ち上がる形態をとり、内外面ともに比較的ていねいなロクロナデがなされる。底部は回転糸切りされる。(3)は内面は比較的ていねいなヘラミガキがなされ、黒色処理される。



第10図 第4号住居址・出土土器実測図

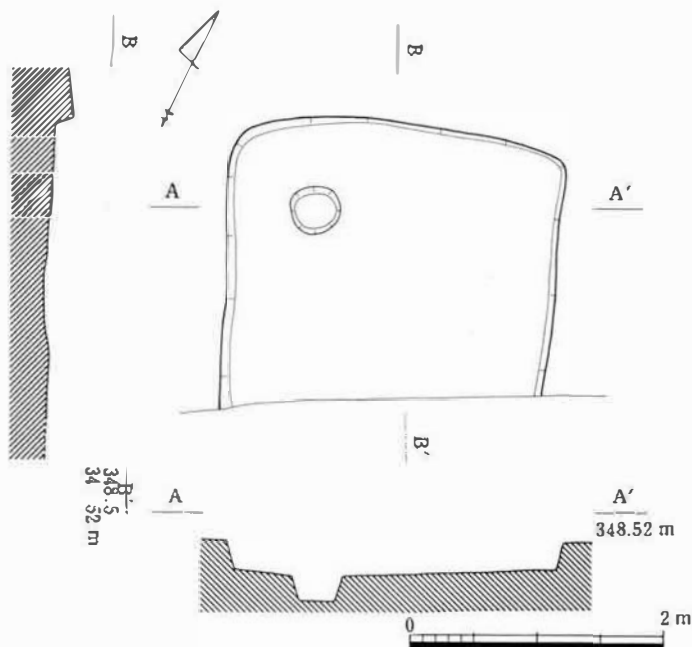
表4 第4号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	10.6			1/8	ロクロ調整	覆土
2	土師	坏	12.8	4.6	3.4	1/2	// 回転糸切り	床面
3	土師	坏	11.8			1/6	// 内面ヘラミガキ 黒色処理	覆土

第5号住居址

遺構 (第11図・図版4)

1号溝址に北壁上面を切られるが床面にまでは攪乱は及んでいない。平面プランは一辺約2.65mの隅丸方形を呈するものと思われ、主軸はN—25°—Wを測る。検出面からの掘り込みは20cm内外と浅いが、いずれも直に近く掘り込まれている。北壁隅にピットが検出されているが柱穴か否かは不明である。住居址内一面にわたって炭化物が薄く堆積し、また炭化材も検出されているが焼土はわずかである。



第11図 第5号住居址実測図

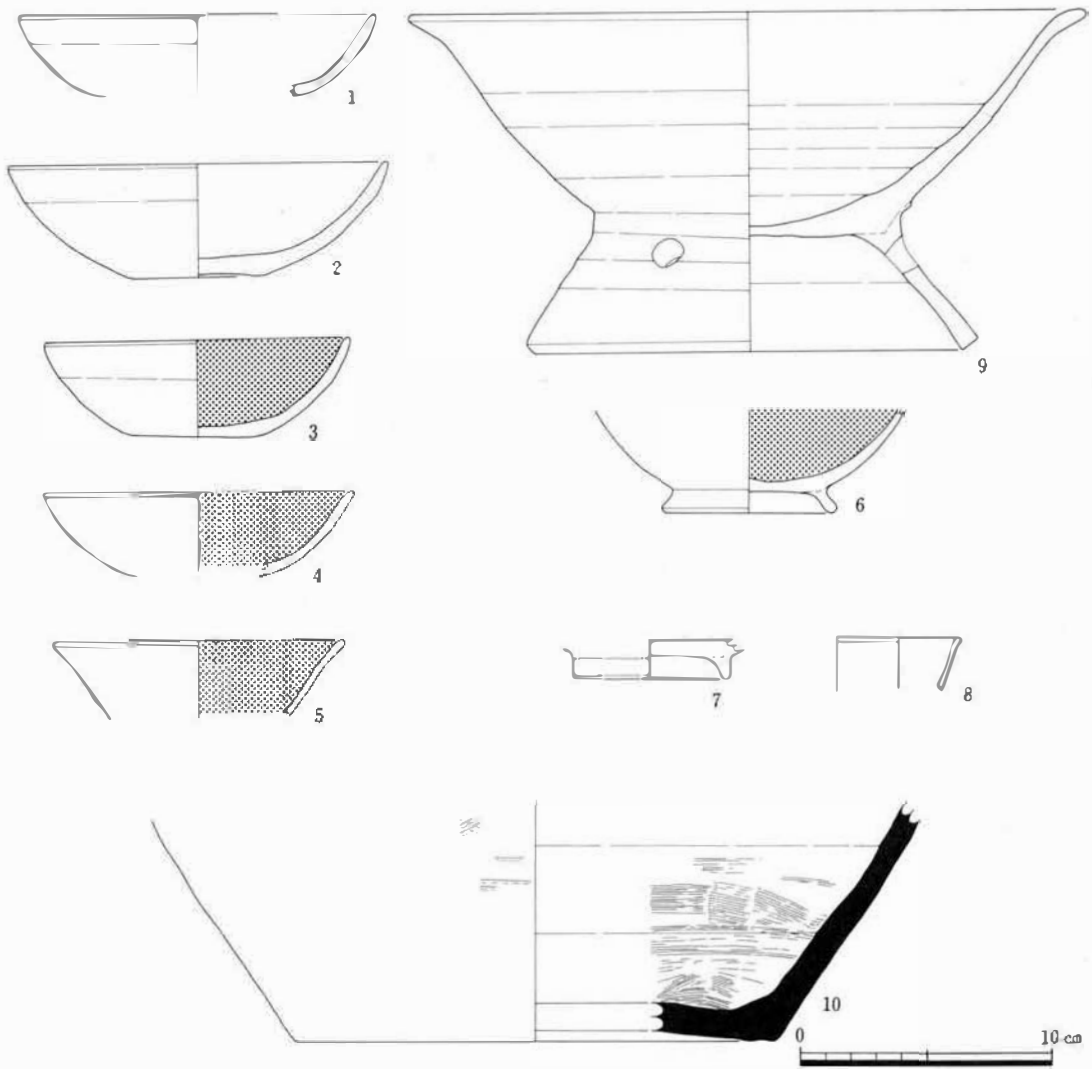
遺物 (第12図・図版8)

土師器坏・高台付坏、灰釉陶器破片、須恵器甕等が出土している。(1)(2)は土師器坏で、ともに坏部は底部より内湾ぎみに立ち上がる形態をとり、内外面ロクロナデされる。(2)の底部は回転糸切りである。

(3)~(7)は黒色土器である。(3)~(5)は坏でいずれも内面が黒色処理され、軽く雑なヘラミガキがなされる。(6)は高台付坏で、坏部内面は黒色処理され、比較的いねいなヘラミガキがなされる。高台はやや長くハの字状に外反し、内外面ともナデ整形される。底外面は切り離し後再調整がなされているが、磨耗が著しく不明である。(7)も高台付坏で、坏部内面が黒色処理され比較的いねいなヘラミガキがなされている。高台は断面三角形形状を呈し、外面は直に近く立ち上がり内外面ともにナデ整形される。底外面もナデ整形されている。

(8)は灰釉陶器碗の口縁部破片である。口縁部は端部で短く強く外反し、丸みをもって終る形態を呈する。

(9)は高台のついた大型の椀形を呈する土師器である。椀部は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に至ってやや長く緩やかに外反する形態を呈する。内外面ともロクロナデされ、ロクロ痕を比較的顕著にとどめる。また内面底部付近は強く雑なユビナデ調整が行われている。高台部は



第12図 第5号住居址出土土器実測図

長くハの字状に直線的に外反する形態をとり、端部は面取りされる。また3ヶ所に、焼成前に円形の穿孔がなされている。第1号住居址出土の(18)も、底部に穿孔がなされる点異なるが、形態は同一のものと予想される。内面底部付近の調整の粗雑さから(18)同様供膳形態以外の機能が推定される。

(10)は大形の須恵器甕の底部付近の破片である。外面には平行タタキの痕跡が認められ、また自然釉が付着している。内面にはカキメが顕著に認められる。

表5 第5号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	14.0			1/8	ロクロ調整	覆土
2	土師	坏	14.9	5.0	4.5	1/2	〃 回転糸切り	覆土・床直上
3	土師	坏	12.0	5.5	3.8	3/4	〃内面ヘラミガキ黒色処理	〃
4	土師	坏	12.1			1/2	〃 〃	
5	土師	坏	11.4			1/6	〃 〃	覆土・床直上
6	土師	台坏		6.6		1/2	〃 〃	〃
7	土師	台坏		6.0		3/4	〃 〃 回転糸切り→ナデ	〃
8	灰釉	椀						覆土
9	土師	台鉢	26.8	17.0	13.4	3/5	ロクロ調整 底部に3個穿孔	床直
10	須恵	甕		19.0		1/4	外面平行タタキ 内面カキメ	覆土

第1号特殊遺構

遺構 (第13図・図版4)

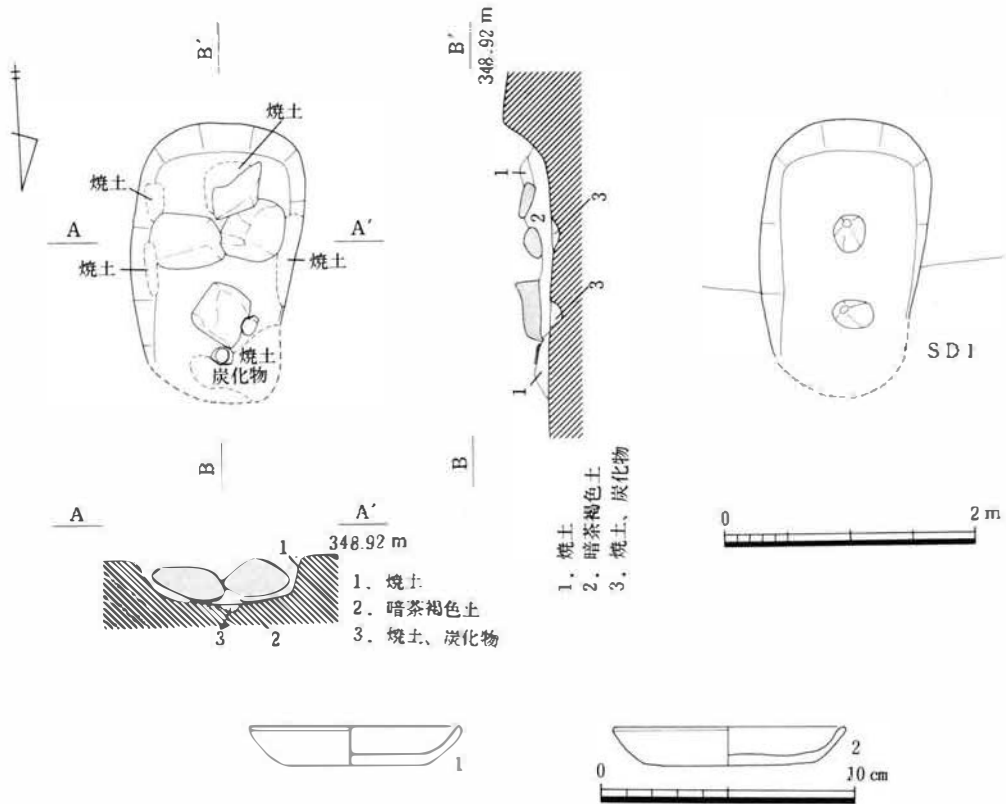
1号溝址に切られており、長さおよそ2.20m、幅1.30mを測り、検出面からの深さは約30cmである。底面上には焼土と暗茶褐色土が堆積しており、その上に径30～50cmほどの石が4個検出され、また2点の土器が出土している。底面には2つの小ピットが検出されたが、ともに焼土と炭化物が充満しており、また獣骨片も若干検出されている。

遺物 (第13図・図版8)

いわゆるカワラケが2点出土している。ともに手づくねによるものと思われ、底面には指頭による押捺の痕跡が比較的顕著に認められる。調整は全体的にナデ調整されるのみである。胎土も色調は内外面ともに白黄色を呈し、本遺跡出土の他の資料に比べ異質である。

表6 第1号特殊遺構出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	8.2	5.4	1.6	2/3	手づくね	
2	土師	坏	9.0	6.8	1.5	2/3	〃	



第13図 第1号特殊遺構・出土土器実測図

第1号土壌

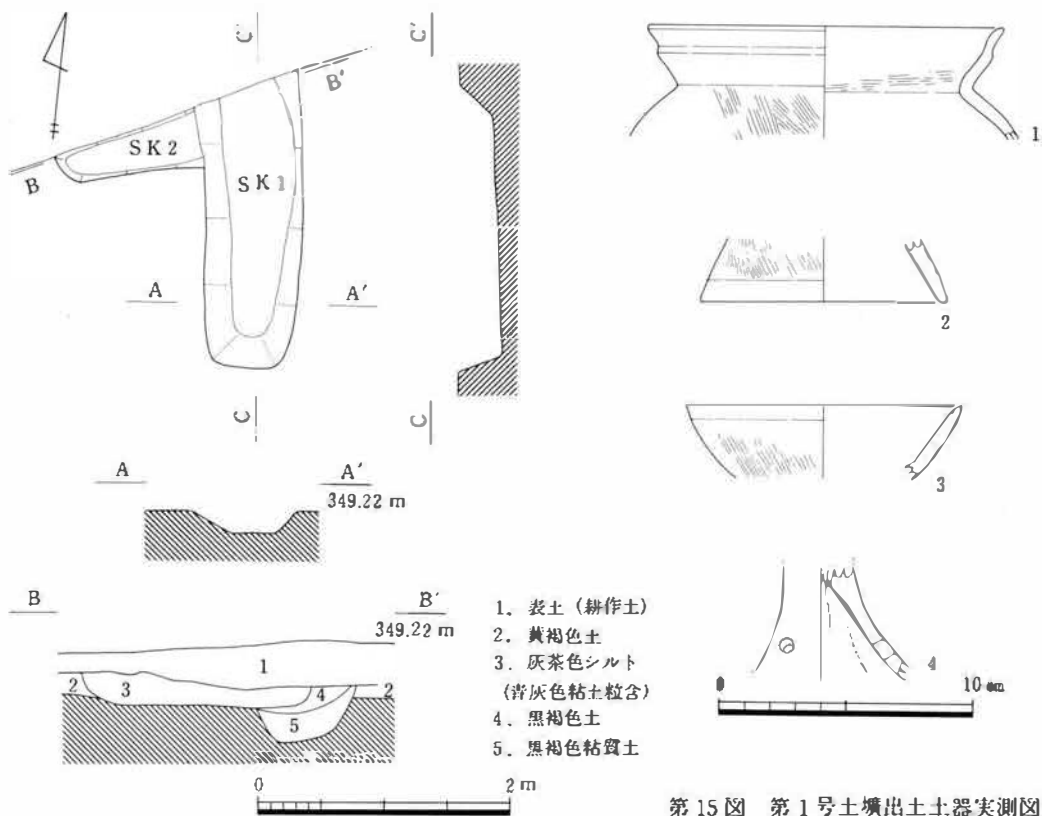
遺構 (第14図・図版4)

2号土壌の下に検出され、北端は調査区域外となる。平面プランは長軸約2.50m、短軸0.80mの長方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みは約40cmを測り、断面逆台形状のゆるやかな掘り込みを呈する。

遺物 (第15図)

古式土師器が4点出土している。(1)は甕の口縁部破片である。口縁部はくの字状の鋭い屈曲をなして頸部から外反し、端部は強いヨコナデが加えられることによって中位に稜をなして伸び上がる形態をとる。口縁部は内外面ともに強いヨコナデが加えられ、胴部外面には斜方向の細いハケ整形がなされる。形態整形の面からは東海系の土器かと思われる。

(2)は台付甕の脚部破片である。内外面ともにハケ整形後ナデ整形される。(3)は小型高坏の坏部であろうか。外面には斜方向のハケ整形痕が認められる。(4)は小型器台の脚部である。脚端がハの字状に大きく開く形態が予想される。脚部には円形の透し孔を3個有する。



第15図 第1号土坑出土土器実測図

第14図 第1号・第2号土坑実測図

表7 第1号土坑出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	甕	13.8			1 / 6	外面 ハケ 内面ナデ	覆土
2	土師	甕		9.5		1 / 4	外面ハケ→ナデ 内面ハケ→ナデ	〃
3	土師	高杯	10.9			1 / 6	外面ハケ→ナデ	床直上
4	土師	器台				1 / 2	ナデ	覆土

第2号土壙

遺構 (第14図・図版4)

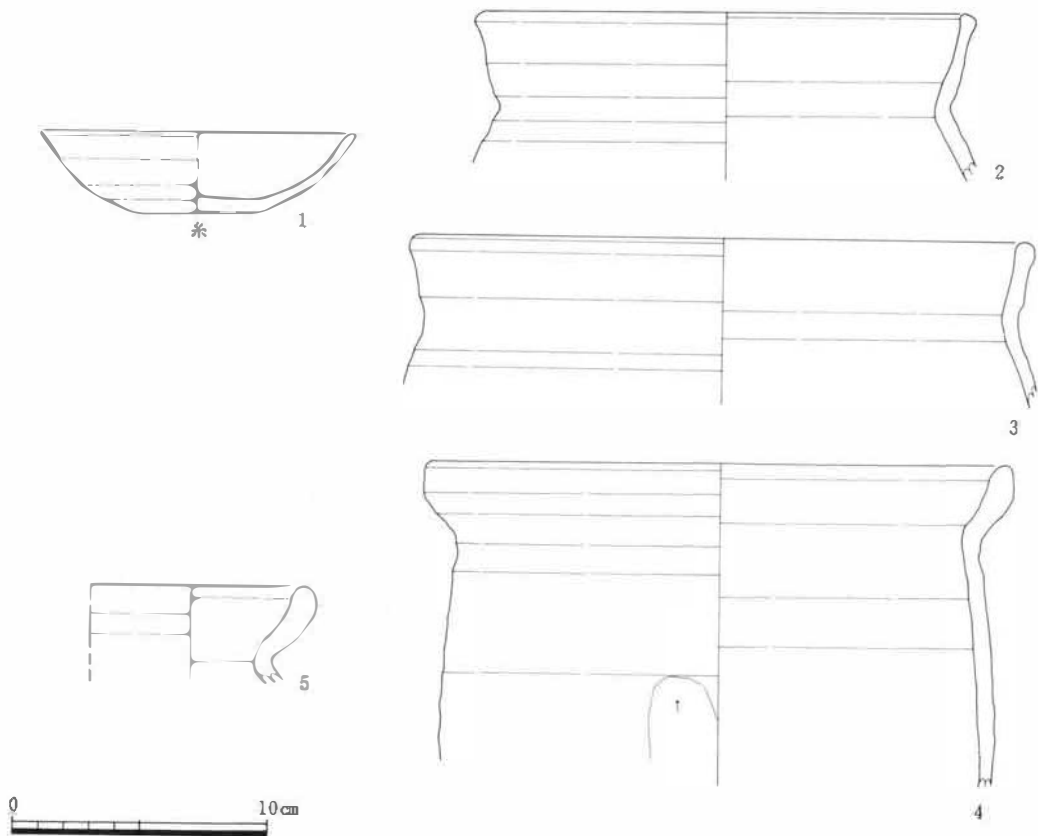
1号土壙を切って構築されるが北側は調査区域外である。平面プランは長軸約1.50mの長楕円形もしくは長方形を呈すると思われる。検出面からの掘り込みは20~30cmを測り、舟底状の形態を呈する。

遺物 (第16図)

土師器杯・甕が出土している。(1)は杯部が底部より内湾ぎみに立ち上がり、端部にて若干外反する形態を呈する。内外面ともロクロナデされ外面にはロクロ痕を顕著に残す。

(2)~(5)は甕である。(2)(3)はともに口縁部が頸部から緩やかにくの字状に立ち上がる形態を呈し、外面にはロクロ痕を顕著に残す。

(4)は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し、口縁部から胴上半はロクロナデがなされ、胴中位以下はその後縦方向のヘラケズリがなされる。(5)も(4)と同様の口縁部形態をとっている。



第16図 第2号土壙出土土器実測図

表8 第2号土壌出土土器観察表

番号	種別	器種	法			遺存度	成形・調整・他	備考
					量			
1	土師	坏	12.3	4.9	3.2	1/2	ロクロ調整 回転糸切り	床直上
2	土師	甕	19.2			1/8	〃	覆土
3	土師	甕	24.0			1/6	〃	覆土・床直上
4	土師	甕	23.0			1/5	〃 外面ケズリ	〃
5	土師	甕					〃	〃

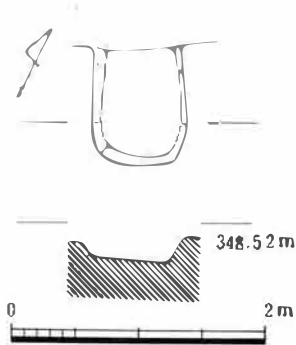
第3号土壌

遺構

平面プランは短軸0.80m、長軸1.20mほどの楕円形を呈すると思われるが、北側は調査区域外となり詳細は不明である。断面は逆台形状を呈し、掘り込みは比較的浅い。東ぞいの底面付近に焼土・炭化物が集中して検出されている。

遺物

土師器の小破片が出土しているのみで、実測可能な遺物はない。

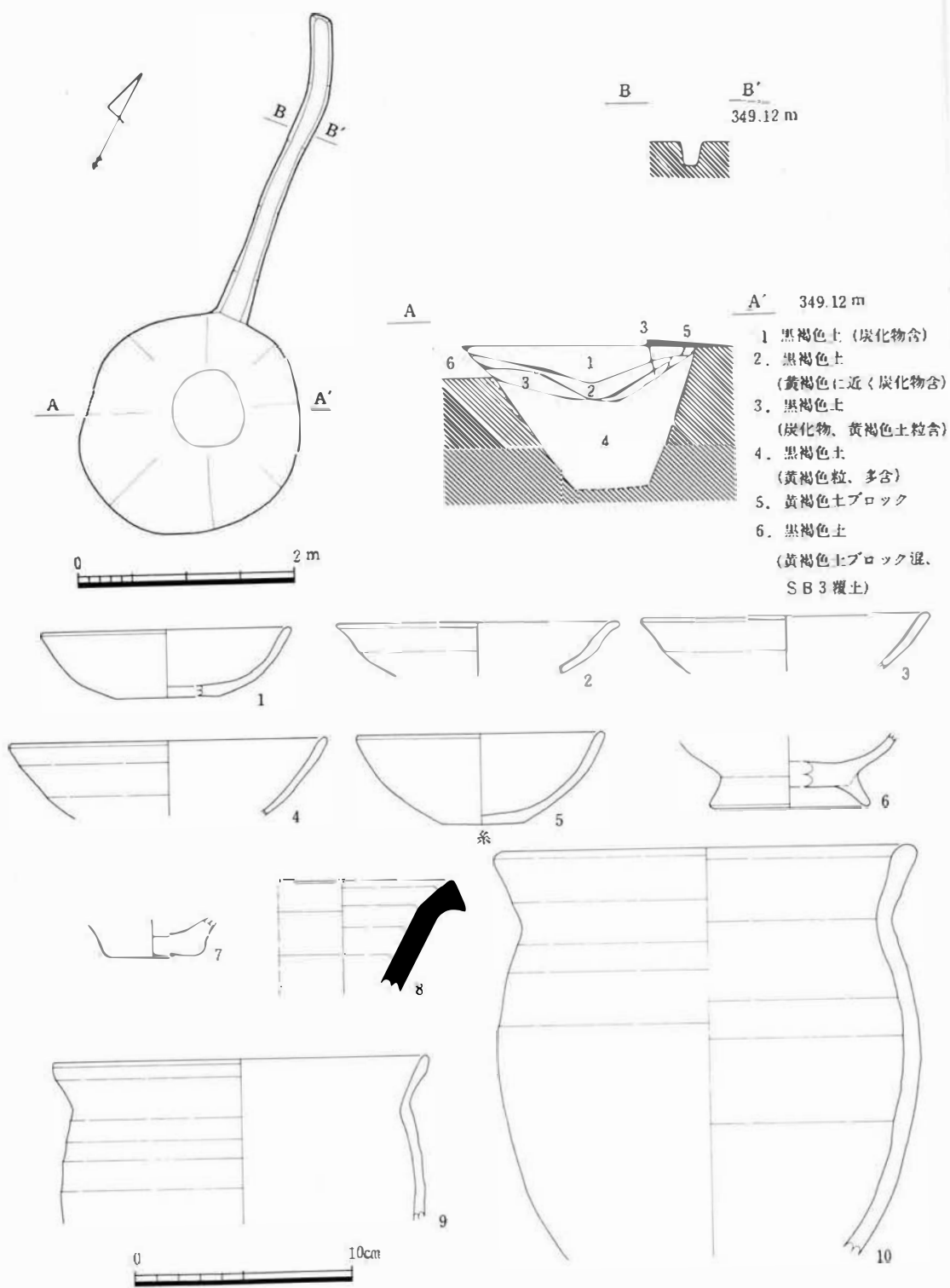


第17図 第3号土壌実測図

第4号土壌（井戸址）

遺構（第18図・図版5）

3号住居址を切って構築されている。平面プランは径約2.0mのやや不整な円形を呈する。深さは湧水のため完掘し得ず不明であるが、1.40mまでは確認されている。断面は逆台形状を呈し、覆土は全部で5層に分層されたが、レンズ状の自然堆積は上層においてのみ確認されている。以上のことより本址は素掘りの井戸址と考えられるが、これとともに北側へ約3mほど伸びる幅20cm前後、深さ15~20cmの細い溝が検出されている。本址と直接関連するものか否か不明であるが、一応同一の遺構として扱っておきたい。



第18図 第4号土坑(井戸址)・出土土器実測図

遺物 (第18図)

土師器坏・甕が出土している。(1)～(5)は坏で形態の上からは、坏部が底部から内湾ぎみに立ち上がって終る(1)(4)(5)と、坏部中位から口縁部が外半して開く形態をとる(2)(3)の二者が存在する。(5)を除きいずれも内外面ともにロクロナデされる。(5)の内面には炭素の吸着が認められ色調は黒褐色を呈するが、ヘラミガキ等はなされず、本来の黒色土器とは区別して考えておきたい。底部は回転糸切り痕をとどめている。

(6)(7)は黒色土器である。(6)は高台付坏で坏部内面は黒色処理され、軽く雑なヘラミガキがなされる。高台は三角形状を呈し短くハの字状に開く形態をとり、外面への貼り付けは雑で接合部が明瞭にわかる。高台部の整形は内外面ともに雑なナデ整形で、底外面もナデ整形される。

(8)は須恵器の甕口縁部破片で外面は平行タタキの後、強いヨコナデが行われる。(9)(10)は土師器の甕である。(9)はやや小型品で、口縁部はくの字状に緩やかに立ち上がり、外面にはロクロ痕を顕著にとどめている。(10)は口縁部はくの字状に緩やかに立ち上がり、端部に至って肥厚する形態をとる。整形は口縁部から胴上半にかけて比較的ていねいなロクロナデが行われ、ロクロ痕をとどめてる。胴下半の整形は磨耗が著しく不明である。

9 第4号土壌(井戸址)出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	11.4	4.8	3.1	1/5	ロクロ調整	覆土
2	土師	坏	12.8			1/8	〃	〃
3	土師	坏	13.4			1/6	〃	〃
4	土師	坏	14.6				〃	〃
5	土師	坏	11.4	3.8	4.2	1/6	〃 回転糸切り	〃
6	土師	台坏		7.2		1/4	〃 内面ヘラミガキ黒色処理	〃
7	土師	壺		4.0			〃	〃
8	須恵	甕					〃 外面平行タタキ→ナデ	〃
9	土師	甕	17.2			1/8	〃	〃
10	土師	甕	19.0			1/5	〃	〃

第5号土壌

遺構 (第19図・図版5)

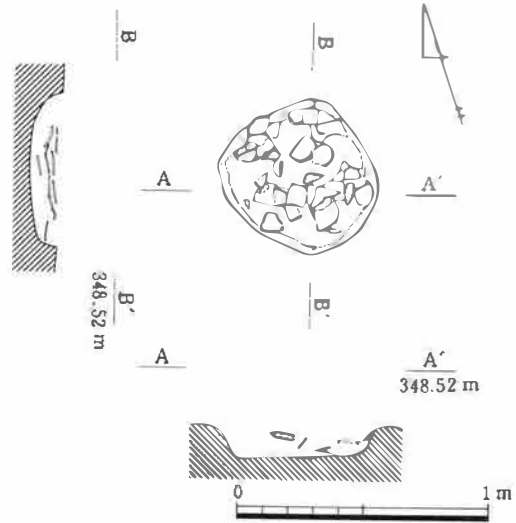
径約1.75mの不整円形を呈する土壌である。検出面からの掘り込みは25～30cmで、掘り込みも

比較的なだらかである。内部からは、かなりの量の土器片が出土しているが、完形品がそのまま土圧によりつぶされたというような状況はうかがわれず、また炭化物・獣骨片等も検出されなかった。

遺物 (第19図)

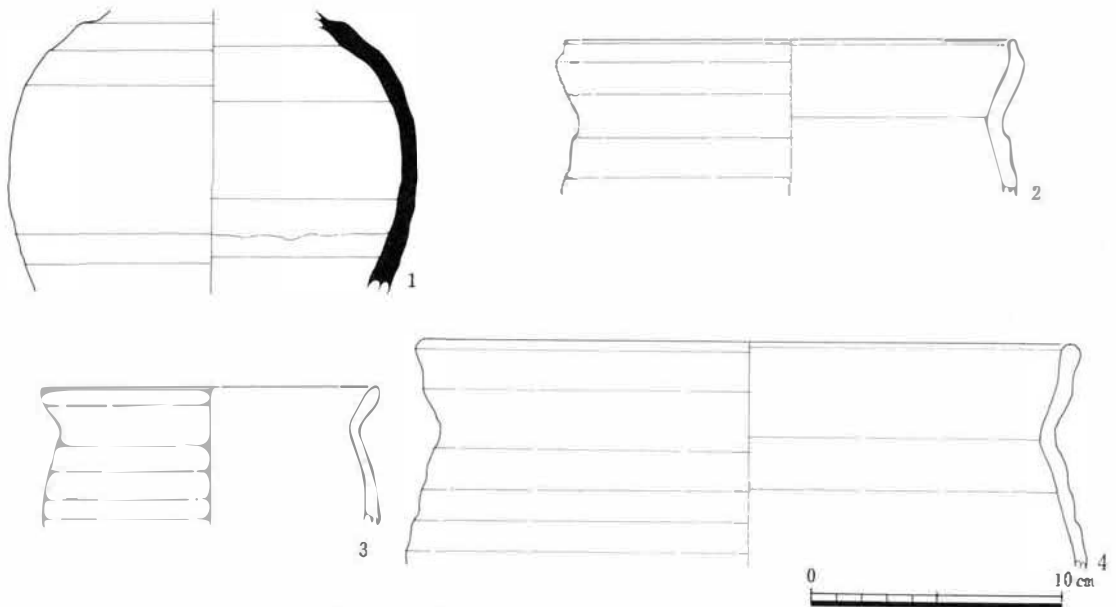
(1)は須恵器長頸瓶の胴部であろうか。内外面ともに比較的いいなロクロナデがなされている。

(2)~(4)は土師器甕である。(2)は口縁部が頸部からくの字状に緩やかに立ち上がり、端部は鋭くつまみ上げられて上方に立ち上がる形態を呈する。内外面ともロクロナデされ、ロクロ痕を顕著に残す。(3)はやや小型の甕で口縁部は頸部からくの字状に短く強く外反する。内外面ともロクロナデされロクロ痕を顕著に残す。(4)は口縁部が頸部よりくの字状に緩やかに立ち上がり端部にて肥厚する形態を呈してロクロ痕を顕著に残す。



第19図 第5号土層・遺物出土状況実測図

その他本遺構からは、外面に平行タタキを残す須恵器甕や土師器破片がかなりの量出土している。



第20図 第5号土層出土土器実測図

るが実測し得たものは上記4点にしかすぎなかった。

表10 第5号土城出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	須恵	長頸瓶				1/3	ロクロ調整	床面
2	土師	甕	17.7			1/3	〃	〃
3	土師	甕	13.0			1/5	〃	〃
4	土師	甕	25.8			1/8	〃	〃

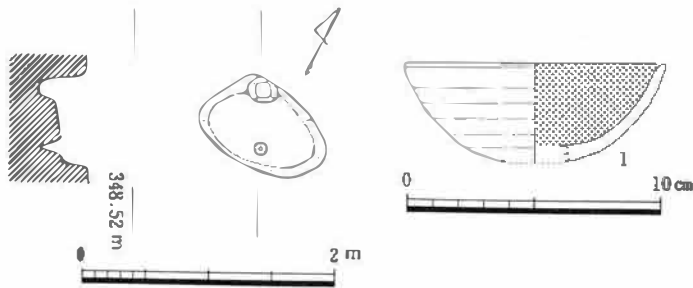
第6号土城

遺構 (第21図)

平面プランは長軸1.0 m、短軸0.70mのやや不整な楕円形状を呈する。深さは20cm前後を測り、直に近く掘り込まれている。内部には2個の小ピットを有するがともに深さは10cmほどである。

遺物 (第21図)

土師器坏が1点出土している。底部から内湾ぎみに立ち上がる坏部形態になる。



第21図 第6号土城出土土器実測図

表11 第6号土城出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	10.2			1/5	ロクロ調整 内面ヘラミガキ 黒色処理	覆土

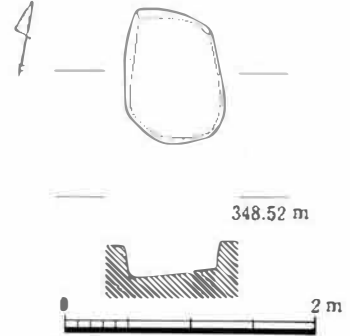
第7号土壙

遺構 (第22図)

平面プランは長軸1.10m、短軸0.75mのやや不整な楕円形、もしくは長方形状を呈している。検出面からの掘り込みは20~25cmと浅いが、直に近く掘り込まれている。

遺物

土師器の小破片が出土しているが、実測可能な遺物はない。

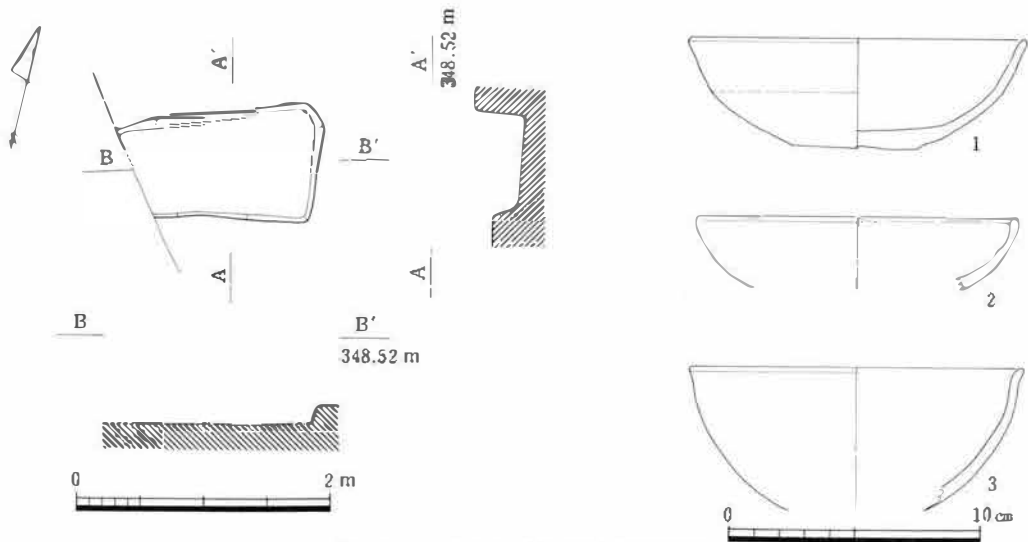


第22図 第7号土壙実測図

第8号土壙

遺構 (第23図)

西側は調査区域外で詳細は不明であるが、長軸は約1.60m・短軸0.90mの隅丸長方形プランを呈すると思われる。また主軸はN-79°-Eを測る。検出面からの掘り込みは北壁で約40cm、東壁・南壁でそれぞれ約20cmをはかり、いずれも直に近く掘り込まれている。



第23図 第8号土壙出土土器実測図

遺物 (第23図)

土師器坏3点が出土している。(1)は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部にて若干外反する形態をとる。内外面ともにロクロナデされるがロクロ痕をさほど顕著に残さない。底部は回転糸切りされる。(2)も内外面ともにロクロナデされるが、器高は低い。(3)は坏部が深く椀に近い形態をとり、口縁部は端部にて短く外反する。外面はロクロナデされ、内面は口縁部付近は横方向、底部付近は縦方向の雑なヘラミガキがなされる。

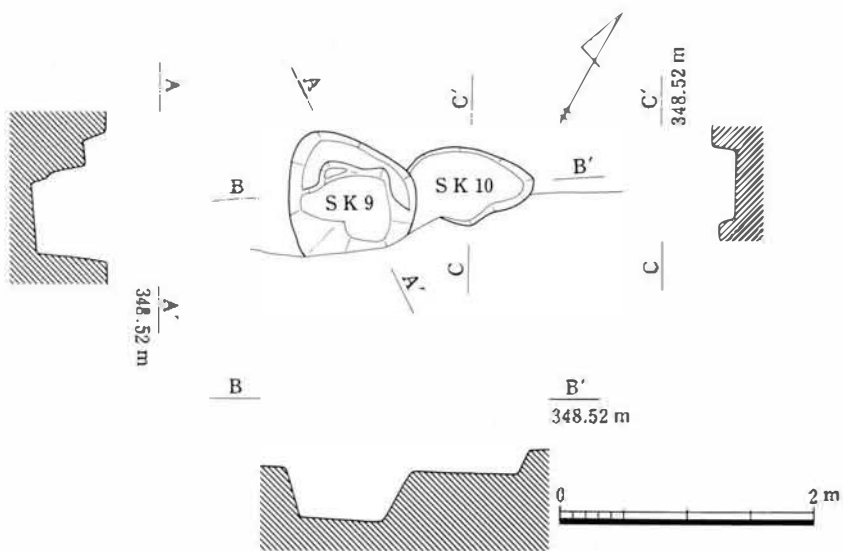
表12 第8号土壌出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	13.3	5.0	4.3	3 / 5	ロクロ調整 回転糸切り	覆土
2	土師	坏	12.5			1 / 4	〃	〃
3	土師	坏	13.2			1 / 8	〃 内面ヘラミガキ	〃

第9号土壌

遺構 (第24図)

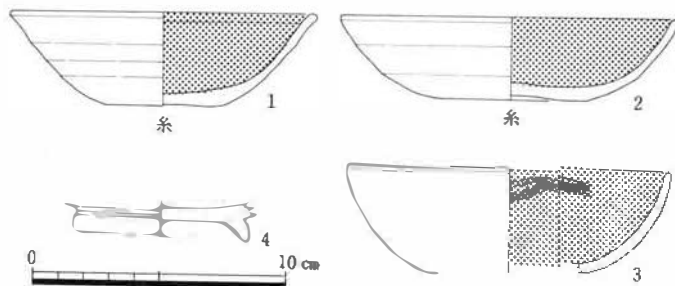
10号土壌を切って構築され、東南端は調査区域外となる。平面プランは径約1.10mほどの不正円形を呈する。検出面からの掘り込みは約40cmを測り、北側では2段にわたる掘り込みが認められる。



第24図 第9号・第10号土壌実測図

遺物 (第25図)

土師器坏・高台付坏が出土している。(1)は坏部は底部より直線的に外開し、口縁部にて若干外反する形態を呈する。内面はヘラミガキされ黒色処理される。外面はロクロ痕を顕著に残し底部は回転糸切り



第25図 第9号土壌出土土器実測図

である。(2)は底部より内湾ぎみに立ち上がる坏部形態をとり、内面は比較的ていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。底部は回転糸切り痕を残す。(3)も坏部は底部より内湾ぎみに立ち上がる形態をとる。内面はていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。また口縁部内面には連弧状の暗文が施されている。(4)は高台付坏で高台は断面三角形を呈する。

表13 第9号土壌出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	11.8	4.8	3.7	1 / 3	ロクロ調整 内面ヘラミガキ	覆土
2	土師	坏	13.3	5.8	3.2	1 / 2	〃 〃	〃
3	土師	坏	12.8			1 / 8	〃 〃	〃
4	土師	台坏		6.8		3 / 4	〃 〃	〃

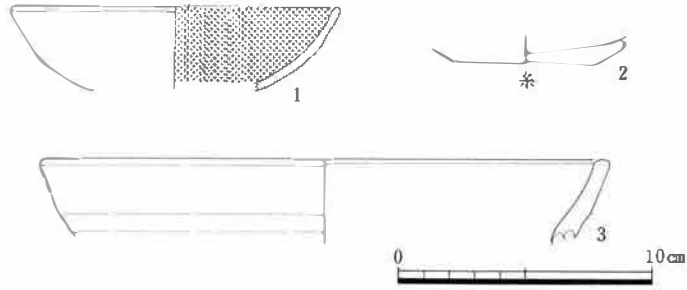
第10号土壌

遺構 (第24図)

9号土壌に切られ、南側は調査区域外となる。平面プランは長軸1.0 mほどの不整楕円形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みは浅く10~20cmを測り、直に近く掘り込まれている。

遺物 (第26図)

土師器坏・甕が出土している。(1)は底部より内湾ぎみに立ち上がる坏部形態を呈し、内面は雑なヘラミガキがなされ黒色処理される。外面は比較的ていねいなロクロナデがなされる。(2)は坏底部破片で、底外面には回転糸切り痕が残される。(3)は甕の口縁部破片で、頸部から内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し、内外面ともにロクロナデされる。



第26図 第10号土壙出土土器実測図

表14 第10号土壙出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	12.6			1/6	ロクロ調整 内面ヘラミガキ	床直上
2	土師	坏		5.4		1/4	// 回転糸切り	//
3	土師	甕	22.2			1/8	// //	//

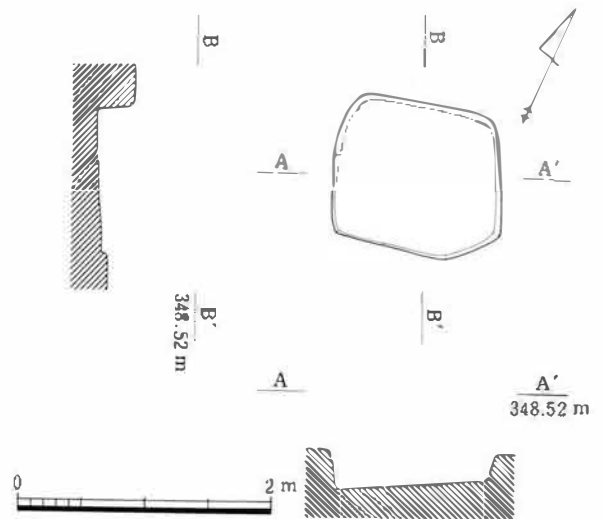
第11号土壙

遺構 (第27図)

平面プランは一辺1.30mほどのやや不整な方形を呈し、1号溝址を切っている。検出面からの深さは20~30cmを測るが、南側は浅く不明瞭である。掘り込みはいずれも直に近い。覆土は他遺構とは異なり暗黄褐色の砂質土であった。

遺物

若干の土師器小破片が出土したのみで、実測可能な遺物はない。



第27図 第11号土壙実測図

第12号土壌

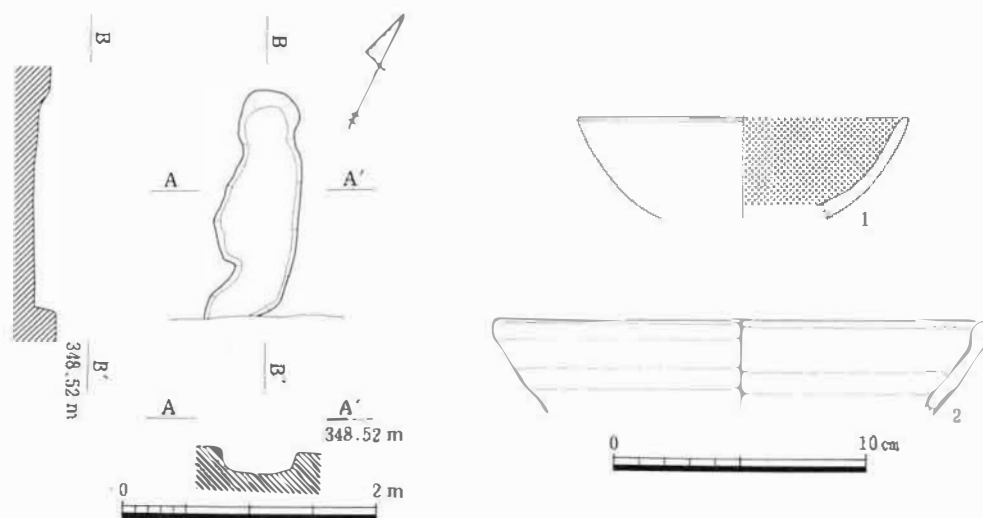
遺構 (第28図)

北西端上面を1号溝址に若干切られ、また南東端は調査区域外となる。平面プランは長軸1.90m、短軸約0.50mの不整長楕円形状を呈し、主軸はN-25°-Wを測る。検出面からの掘り込みは10~15cmで、1号溝址に切られる北東端を除き、直に近く掘りこまれている。遺物は覆土内より若干の土師器破片を検出したにすぎない。

遺物 (第28図)

(1)は土師器の坏で、坏部は底部より内湾ぎみに立ち上がる形態をとり、内面は比較的ていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。

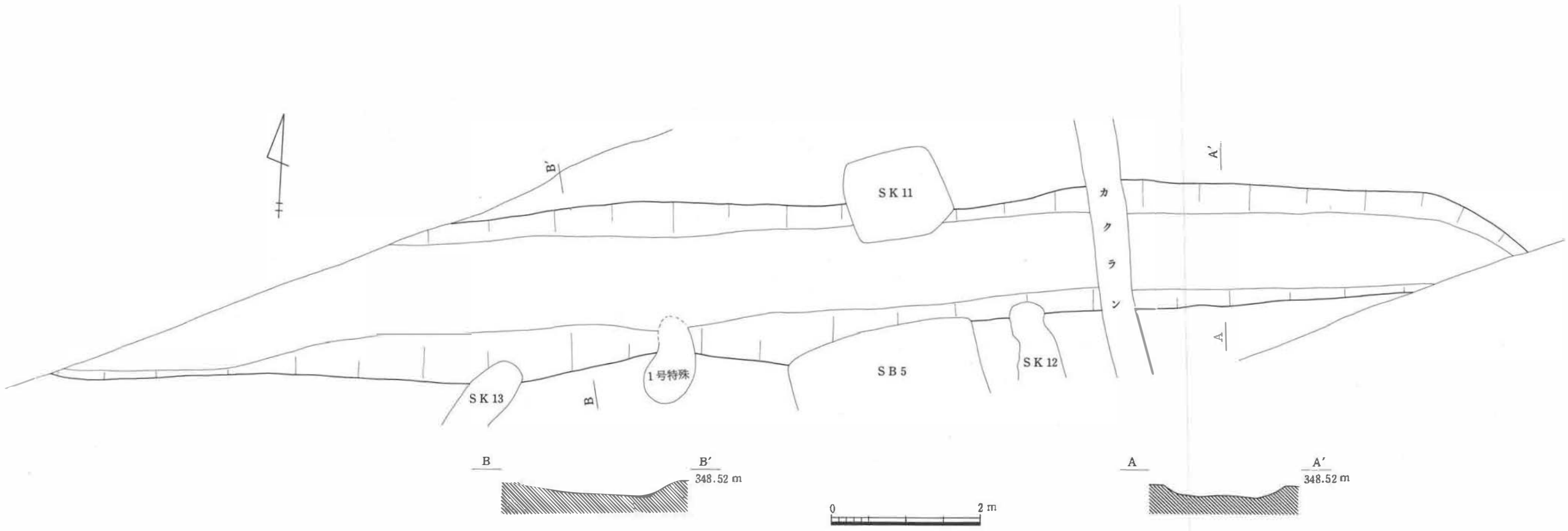
(2)は土師器甕の口縁部破片で、頸部から内湾ぎみに立ち上がり端部にて肥厚する形態をとる。ロクロ痕を顕著に残す。



第28図 第12号土壌・出土土器実測図

表15 第12土壌出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	13.0			1/8	ロクロ調整 内面ヘラミガキ	覆土
2	土師	甕	19.3			1/12	〃 回転糸切り	



第 30 図 第 1 号溝址実測図

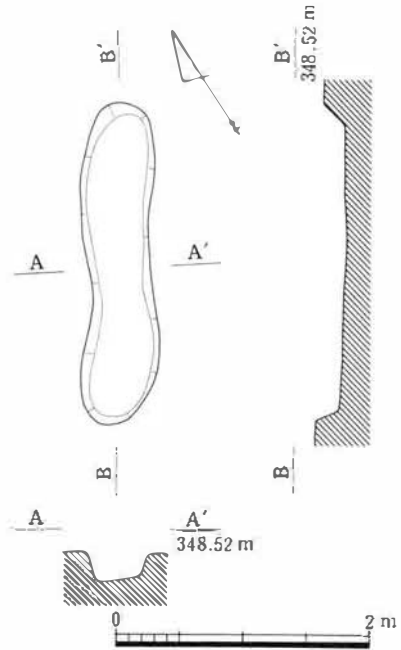
第13号土壇

遺構 (第29図)

平面プランは長軸2.25m・短軸約0.60mの長楕円形状を呈する。検出面からの深さは20~25cmを測り、断面は逆台形状を呈する。

遺物

実測可能な遺物は出土していない。



第29図 第13号土壇実測図

第1号溝址

遺構 (第30図・図版6)

調査区東側において検出された、東西方向に直線的に伸びる比較的大きな溝址で、東端ならびに西端はともに調査区域外となる。5号・6号住居址、12号・13号土壇を切って構築され、11号土壇に切られる。検出された範囲においての長さは約19.3m、幅は最大で2.30m・最小で1.50mを測る。検出面からの深さは15~25cmを測り、断面は低い逆台形状を呈する。

遺物

土師器等の小破片が出土しているのみで、実測可能なものは出土していない。

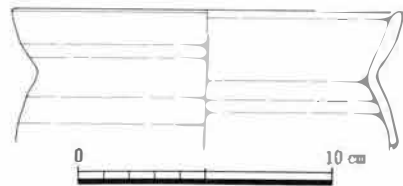
第2号溝址

遺構 (第31図・図版6)

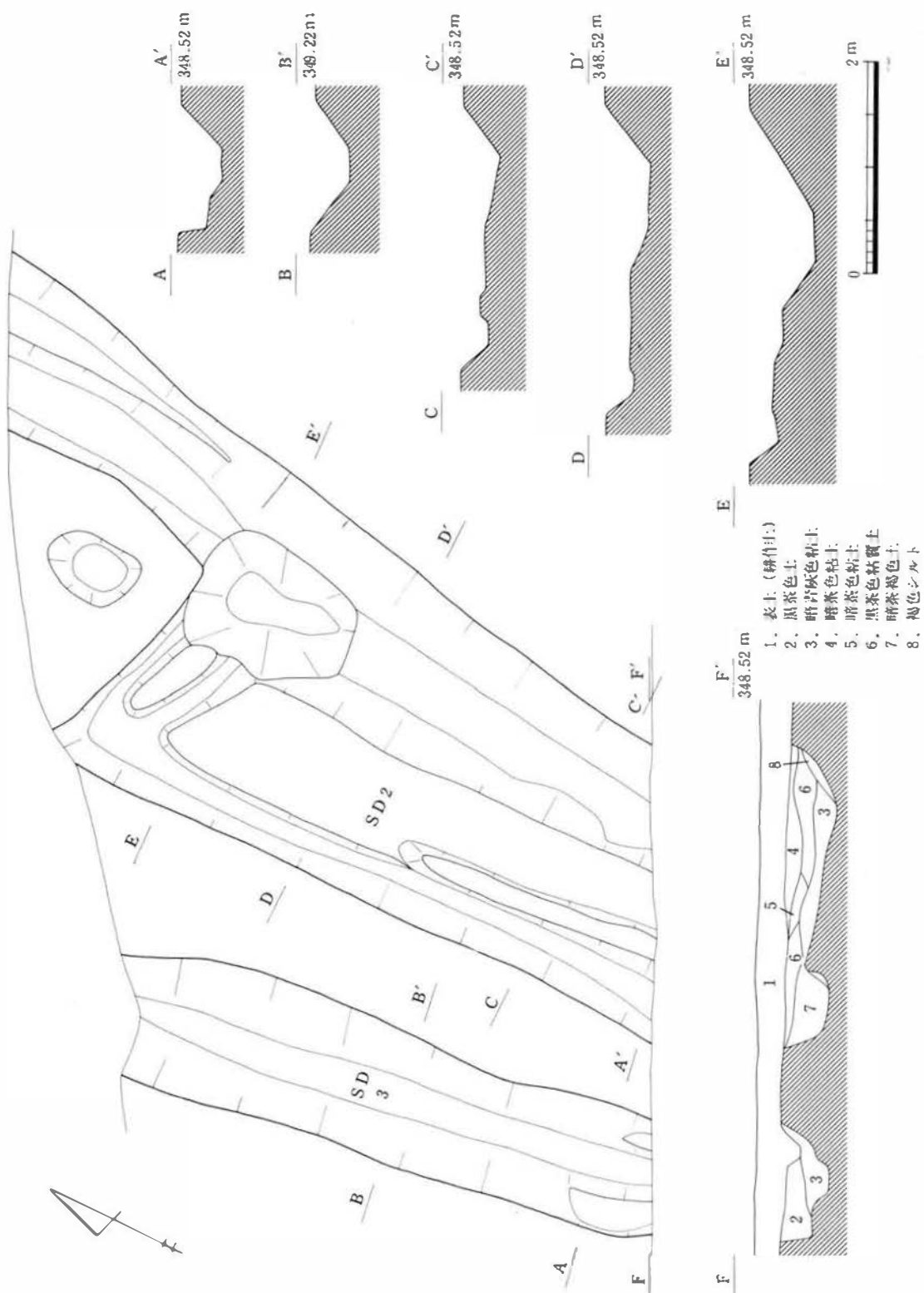
ほぼ南北方向に直線的に伸びる形態を呈し、南端ならびに北端はともに調査区域外となる。中央付近から東溝と西溝の2本にわかれる。

東溝は検出された範囲での長さは約7.70m、

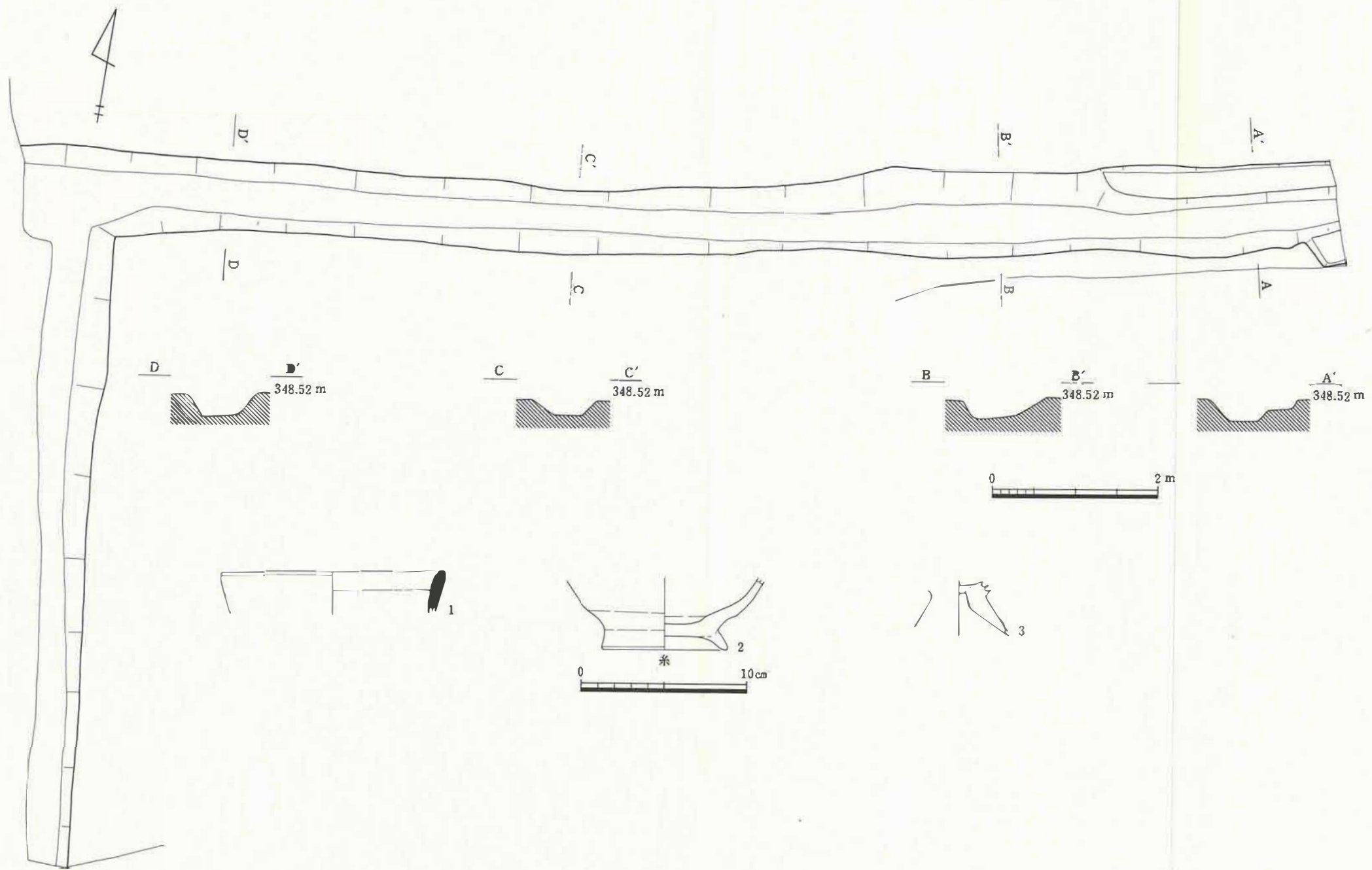
幅は最大で1.70m・最小で1.10mを測る。溝底は幅30~50cmを測り、平坦で溝の台面は低い逆台形状を呈している。西溝は東溝中央付近から西方へ突出し、その後直角に近く折れて東溝と並行して伸びる形態をとる。検出された範囲での長さは約6.10m、幅約0.50mを測る。検出面からの掘り込みは30cm前後で東溝に比べ浅い。東溝と西溝の合流点には、1.60×1.20mの不整楕円形状



第32図 第2号溝址出土土器実測図



第 31 図 第 2 号・第 3 号溝址実測図



第 33 图 第 4 号沟址·出土土器实测图

のピットが存在するが溝址に伴うものであるかは不明である。

遺物 (第32図)

土師器甕が1点出土している。口縁部は頸部からくの字状をなして緩やかに内湾ぎみに立ち上がり、端部付近にて肥厚する形態を呈する。内外面ともにロクロナデされ、ロクロ痕を顕著に残す。

第3号溝址

遺構 (第31図・図版6)

2号溝址とならんで検出され、主軸方向も同様にほぼ南北方向に直線的に伸びる形態をとり、南端ならびに北端はともに調査区域外となる。検出された範囲での長さは約5.10m、幅は最大で1.40m・最小で1.10mを測る。溝底面の幅は平均して30cmほどで、溝の断面は逆台形状を呈し掘り込みはかなりゆるやかである。溝南端では中位にテラス状の平坦面が検出されているが、性格は不明である。

遺物

土師器の小破片等が検出されているが、実測可能な遺物は出土していない。

第4号溝址

遺構 (第33図・図版3・6)

4号住居址を切って構築されている。東西方向に直線的に伸び、調査区南端にて直角に近く折れその後南方へ直線的に伸びてゆく形態を呈する。東端と南端とはともに調査区域外となる。長さは東西方向では16.20m、南北方向では7.60mまで確認され、幅は最大で1.10m、最小で0.80mを測る。検出面からの掘り込みは浅く30cm前後で、溝底は平坦で断面逆台形状を呈する。

遺物 (第33図)

(1)は須恵器で短頸壺の口縁部破片であろうか。内外面ともに自然釉が付着している。(2)は高台付坏である。坏部内面はていねいなヘラミガキがなされ、黒色処理される。高台は断面長三角形状を呈してハの字状にやや長めに外開し、内外面ともにナデ調整される。坏部との接合部は高台接合後非常に強いユビナデが加えられる。底外面は回転糸切り痕がそのまま残される。

(3)は土師器の高坏脚部破片である。脚部はハの字状に大きく外開すると思われる。古式土師器であろう。内外面とも磨耗が著しく調整等詳細は不明である。

表16 第4号溝址出土土器観察表

番号	種別	器種	法 量			遺存度	成形・調整・他	備 考
			口径	底径	器高			
1	須恵	壺	13.3			1 / 8	ロクロ調整	覆土
2	土師	台坏		7.5		2 / 3	// 内面ヘラミガキ	溝底
3	土師	高坏				1 / 3		覆土

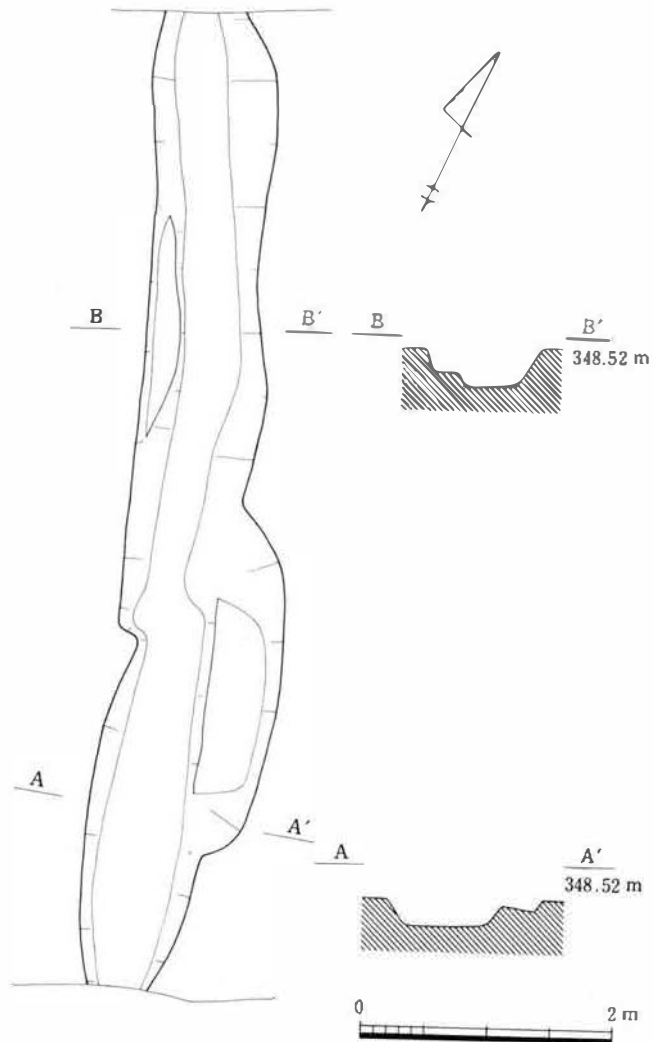
第5号溝址

遺構 (第34図・図版2)

調査区中央付近にて検出され、第2号住居址を切って構築されている。ほぼ南北方向に直線的に伸びて楕円形態を呈する。溝の南北端はともに調査区外であるが、確認された部分での長さは約7.80mを測る。幅は最大部分で1.30mを測るが平均1.0mぐらいである。深さは20~30cmを測り、断面は逆台形状を呈し、底面からの立ち上がりも比較的緩やかである。覆土は暗茶褐色土層一層のみであった。両側面にそれぞれ一ヶ所ずつテラス状の平坦面が確認されているが、柱穴等の痕跡も認められず性格は不明である。

遺物

土師器の小破片等が出土しているが、実測可能なものや時代決定の根拠になり得るものなどは出土していない。



第34図 第5号溝址実測図

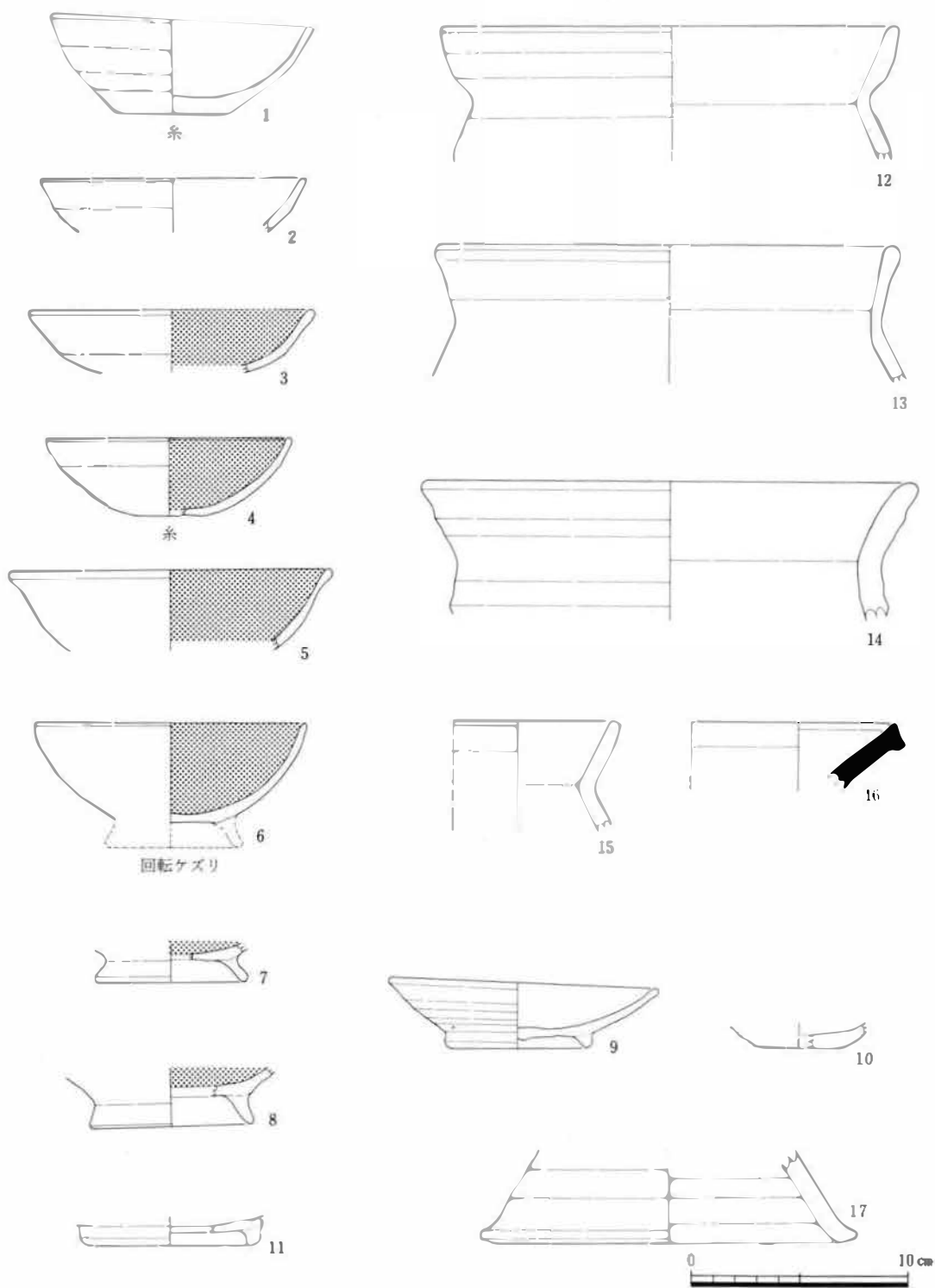
検出面出土の遺物 (第35図)

(1)(2)は土師器坏で、坏部はともに底部より内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し、内外面ロクロナデされる。(1)はロクロ痕を比較的顕著に残し、底部は回転糸切りがなされやや突出する形態を呈する。

(3)～(8)は黒色土器である。(3)～(5)は坏でいずれも内面に軽く雑なヘラミガキがなされ、黒色処理が施される。(4)の底部は回転糸切りがなされる。(6)～(8)は高台付坏である。(6)は坏部が底部から内湾して立ち上る形態をとり、内面は比較的ていねいなヘラミガキが全体的になされ、黒色に処理されている。高台は接合部から欠損しており、また底外面は回転ヘラケズリがなされる。(7)は高台付坏の底部破片で、内面は軽くヘラミガキされ黒色処理される。高台は短くハの字状に直線的に外反する形態を呈し、内外面とも強くナデ整形される。底外面の調整は磨耗が著しく不明である。(8)も高台付坏の底部付近の破片である。内面は比較的ていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。高台は断面長三角形状を呈して、やや長くハの字状に外反し内外面ともナデ調整される。外面の接合は雑になされ接合痕が明瞭に残る。底外面はナデ調整される。(9)～(11)は灰釉陶器である。(9)は高台付の皿で、体部は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部にて若干外反し丸みをもって終る形態をとる。釉は外面は中位まで、内面は底部を除く全面にかけられている。また底外面にも若干釉が付着しているが意図的なものとは認められない。高台は三ヶ月高台であるが全体的にナデ調整され、外面下半の稜は丸みをもってやや不明瞭である。底外面はナデ調整される。(10)は坏の底部破片で、内面は底部一面に釉がかけられている。外面はロクロナデの痕跡を顕著にとどめ、また底部は回転糸切り痕をそのまま残している。(11)は高台付碗の底部破片である。高台は三ヶ月高台であるが、全体的に強くナデ調整され外面下半の稜は丸みをもち不明瞭である。底外面中央部には回転糸切り痕が残される。

(12)～(15)は土師器の甕である。(12)は口縁部は頸部より短くくの字状に屈曲したのち、中位に稜をなして立ち上がりつつ外半する形態を呈する。整形はロクロナデで外面にはロクロ痕を顕著に残す。(13)は口縁部は頸部より緩やかなくの字状をなして立ち上がり、端部にて肥厚する形態をとる。整形は内外ともロクロナデされる。(14)は全体的にやや厚手で、口縁部は頸部より緩やかなくの字状をなして立ち上がり内外面ともにロクロナデされる。(15)は強いくの字状の屈曲をなして口縁部が頸部より外反し、端部は面取りされる。(16)は須恵器変形土器の口縁部破片である。

(17)は1号・5号住居址で出土している。高台のついた大型の碗形を呈する土師器の高台の端部かと思われる。ハの字状に直線的に外開した後、端部にて強く短く外反する形態を呈する。内外面ともロクロナデされる。



第 35 図 検出面出土土器実測図

表17 検出面出土土器観察表

番号	種別	器種	法			遺存度	成形・調整・他	備考
					量			
1	土師	坏	11.8	5.2	4.3	2 / 5	ロクロ調整 回転糸切り	
2	土師	坏	12.0			1 / 5	//	
3	土師	坏	12.8			1 / 6	//内面ヘラミガキ黒色処理	
4	土師	坏	11.0	3.0	3.6	1 / 6	// // 回転糸切り	
5	土師	坏	14.5			1 / 8	// //	
6	土師	台坏	12.2			3 / 4	// // 回転糸切り	
7	土師	台坏		6.6		1 / 4	// //	
8	土師	台坏		7.2		1 / 3	// // 回転糸切り	
9	灰釉	皿	12.2	6.2	3.0	3 / 5	//底部ナデ 漬け掛け	
10	灰釉	坏		4.0		1 / 4	// 回転糸切り	
11	灰釉	椀		7.4		1 / 6	// 回転糸切り ナデ	
12	土師	甕	20.7			1 / 8	//	
13	土師	甕	20.8			1 / 8	//	
14	土師	甕	22.4			1 / 8	ロクロ調整	
15	土師	甕					//	
16	須恵	甕					//	
17	土師	台鉢				1 / 8	//	

第4章 調査のまとめ

本遺跡の所在する千曲川左岸の微高地上には、「小島・柳原遺跡群」として包括される多くの遺跡が確認されている。ただし、ほとんどの遺跡が未調査のままとなっているため、広大な範囲に設定されているこの遺跡群の構成には明瞭でない部分が多い。過去に調査をへている遺跡では、「水内坐一元神社遺跡」（長野市教委 1980）において弥生・古墳時代集落、「小島境遺跡」においても同時期の集落址が検出され、遺跡群の構成が一部明かにされたが、今回の調査ではそれよりも時代の下降した平安時代を主体とする集落址が検出されるに至り、新たな知見を加えることができたものといえる。

第2章において述べられているとおり、本遺跡をめぐる環境には複雑なものがある。地理的には、千曲川に合流する犀川・榎花川の氾濫原とされ、更にその沖積面が河川により浸食されて大小の微高地が形成されているという。低湿地が入り組むこのような地形は農耕地として好適の条件であり、弥生時代以降の集落地として開発されてきたものであろう。歴史的に見れば、本集落址の示す平安時代後半の年代を考慮すると、律令体制のなかでの水内郡尾張郷等との関連が注目されることとなり、興味深い課題が提示される結果となる。

以下調査成果を個条書きにし調査のまとめにかえたい。

○検出された遺構は住居址6軒、土塙13基、溝址5基である。溝址は住居址を切って構築されているものが多い（4号住→4号溝、2号住→5号溝、5号住→1号溝）が、住居址どうしの切り合い関係は認められない。

○本遺跡中最も時期の遡る遺物を出土したのは第1号土塙で、台付甕・器台等の古式土師器を出土している。特に台付甕は東海もしくは畿内地方にその系譜を求め得る資料であり、古式土師器の良好な資料を出土した近接する小島境遺跡（青木和明 1984）との関連において今後注目すべき資料といえる。

○住居址プランは、やや小型の第5号住居址を除いては、一辺5m前後の方形もしくは隅丸方形を呈する点、この時期の特徴をそなえているものと言えよう。

○住居址出土土師器の組成を見ると、土師器を主体として、それに内面黒色処理された土師器と灰釉陶器が従的に伴うといった様相がうかがわれ、須恵器は甕形土師器が伴うのみで、基本的には組成から脱落するといった様相がいずれの住居址においても認められる。このことよりすれば、これらの住居址には平安時代後期、11世紀後半～12世紀といった年代が与えられようか。

また第1号特殊遺構は1号溝跡に切られ詳細は不明ではあるが、いわゆるカワラケが2点出土しており、さらに新しい年代が与えられよう。

●第2号住居址から出土した緑釉陶器の皿は緑釉陶器としては、浅川西条遺跡第14号住居址、同第20号住居址出土資料（長野市教委 1975）につづいて長野市内では3例目の資料であり、本地域の古代の様相をさぐる上で、今後注目されるべき資料といえよう。

○溝址は1～5号まで検出されている。幅・深さなどの規模の点においては各遺構ごとにかかなりの偏差が認められるものの、平安時代に比定される住居址を切って構築されるものが多い。またいずれの溝址も確認された範囲においては東西方向、もしくは南北方向へと直線的に伸びてゆく形態を示している点特徴的である。今後、本遺跡調査区のみといった微視的な視点のみからではなく、古代～中世における本地域の生業形態との関連といった巨視的視点からの把握を試みる必要性が痛感される。

青木和明 1984 「小島境遺跡」 『古墳出現期の地域性』第5回三県シンポジウム資料

長野市教委 1975 『浅川西条遺跡』

長野市教委 1980 『三輪遺跡 付 水内坐一元神社遺跡調査報告』



調査区全景



調査区西側全景

图版2



第1号住居址



第1号住居址
遺物出土狀況



第2号住居址
第5号溝址



第 3 号住居址



第 3 号住居址遺物出土狀況



第 4 号住居址
第 8・9・10 号土壙
第 4 号溝址



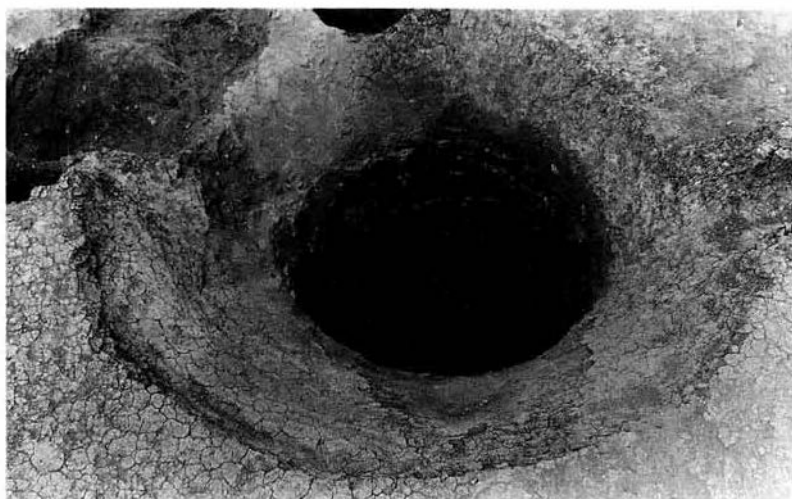
第5号住居址



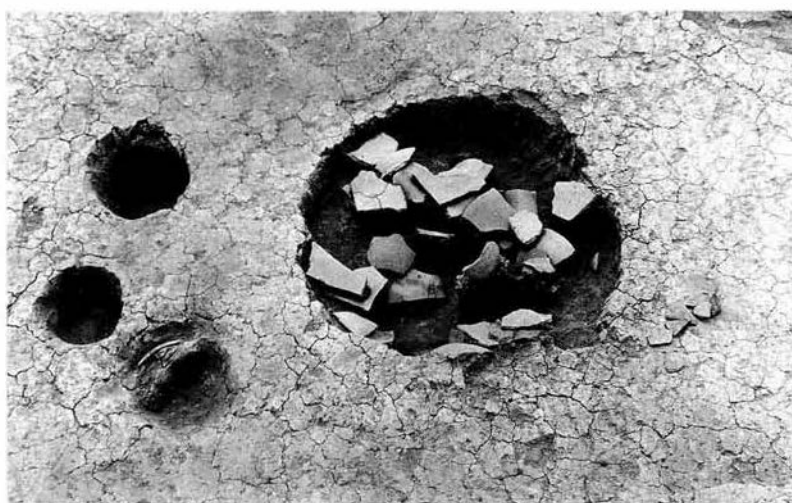
第1号特殊遺構



第1・2号土坑



第 4 号土坑 (井戸址)

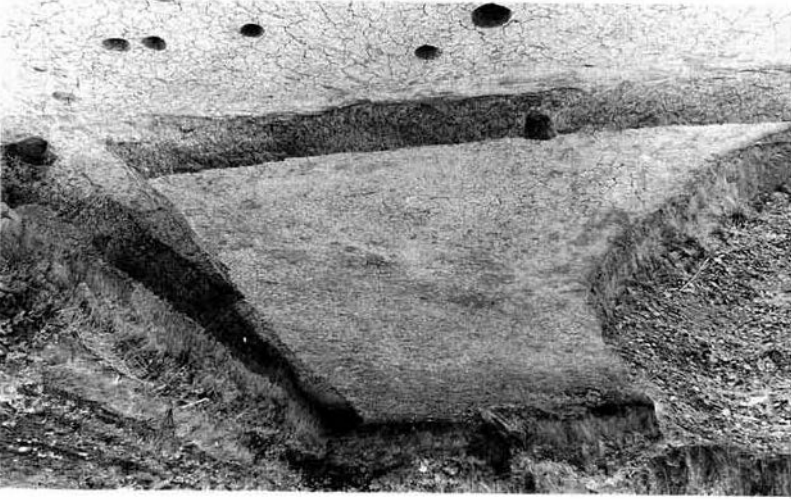


第 5 号坑遺物出土狀況

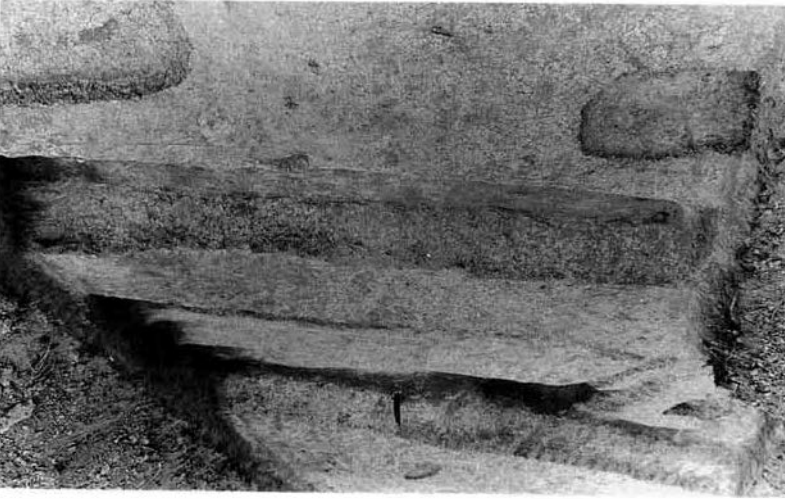


第 13 号土坑

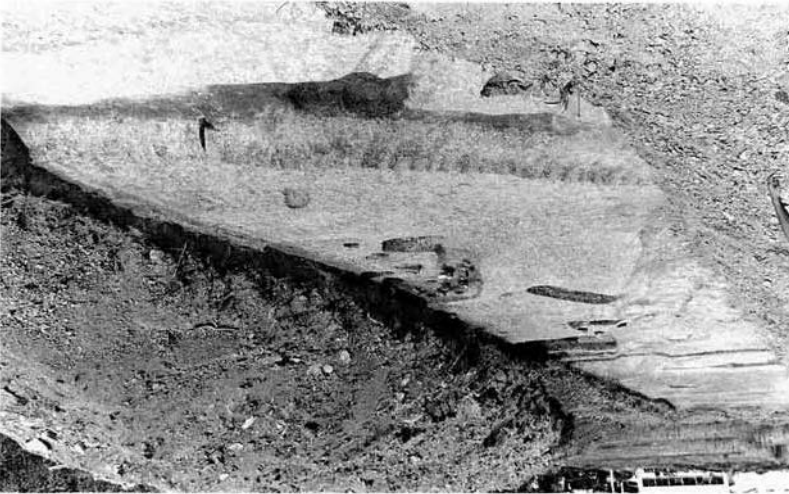
第4号溝址

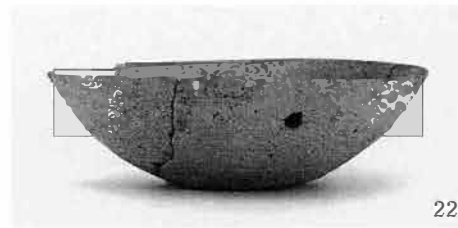
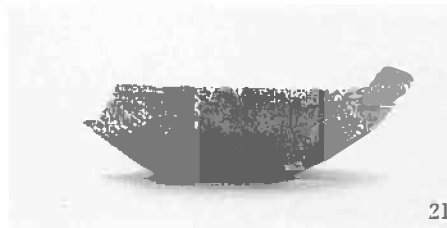
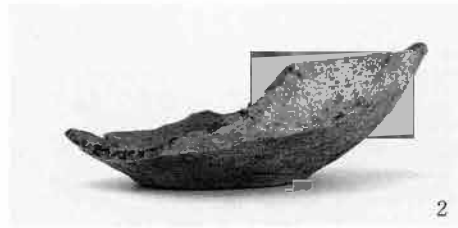


第2号・3号溝址

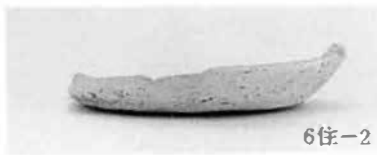


第1号・2号溝址





第 3 号住居址出土土器



長野市の埋蔵文化財 第25集

小島・柳原遺跡群

南川向遺跡

昭和63年2月1日 印刷

昭和63年2月10日 発行

編集・発行 長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

印刷 ほおずき書籍(株)